

ク集舶ス軍卒スベテ四萬五千ト稱ス兩處ノ蒸氣ニテ我五時ニシテ往返ス
 ト云去ル六月廿日英軍ヨリ四五艘ノゴンボウ是蒸氣船也遠キ處ノ自在ニ走ル
 也ヲ發シベイホフペータンノ港口測量ス清軍ヨリ炮ヲ放ツ雨ノ如發モ
 アタラス船ハカヘル也同廿三日軍艦許多寄セ來ル將船ハ三四里沖ニ碇舶
 スアト船ハ皆港ニ來リ放炮ツト雖モ更ニ應スル者ナシ忽チ炮臺ニ登テ見
 ニ人更ニナシ仍テ皆々是臺場ニ上陸ス此處水乏キニヨリ近キ邊ニ清水ア
 ラント五十人バカリ水ヲ尋ル處忽チ四五百ノ清卒來リ取圍ミ皆々危キ處
 元帥ヨリ援兵許多來リ織死スル者十四人清卒四萬餘ヲ打殺スト云此處ヨ
 リ二里ハカリ隔テ一大ノ要害アリ衛卒四萬餘騎馬一萬五千七月五日此處
 ニテ合戦スル我二時半清兵白旗ヲ出シ悉ク降人トナリ終ノツトル英死
 者百人佛死者一百五十餘清死スル者萬ヲ以テ數フト云其ワケ客歲英國ニ
 ノ發明スルアーンムスツローンゴント云鐵炮遠町ノ利器ヲツルヘキ也
 我二里半内外虛發更ニナシト云タ、チニ天津ヘヲシ寄セル同處皆降ニ出

注本ノマ、

ル是ニヨリ順天府帝王始群臣悉ク滿洲ニ走ル今英佛北京ノ政道ラシクト
 云サスカノ大境一舉ニシテ亡滅ス復報待ノミ
 客歲ヨリ支那海岸ノ各處守衛コレナク強盜徘徊シ土民困難ニツキ各國ヨ
 リ警衛ス一珍説是北兩川多クシテ相カモラズ
 前明ノ嫡孫ト稱シ七八ヶ年前ヨリ廣東以西ヨリ義兵ヲ起シ漸クニハビコ
 リ既ニ南京ヲ取り今居所ト定メ自皇帝ト稱ス兵卒許多アリト云内地七分
 ハ併吞スト上海ニ使ヲサシヲクリ西國諸蕃ト和親定約シ内地住居隨意タ
 ルヘキ由申遣スト雖モ一同ノ返答ニハ今北徼ト雖モ北京有君ハ是義兵ノ
 徒ト云モ北京ノ皇帝ニハ逆先國內ノ事ヲシマイ復イカヤウトモイタサン
 ト云南京大ニ怒リ上海軍卒ヲサシ向ケル嘆一千佛一千花旗一千ノ兵カチ
 テ護衛ス一戦ニ打退リケルト云是明孫一時ノ英傑ノ由過ル處ノ寺皆破却
 スト云衣服容前朝ニ復古スル也

萬延庚申七月

鈴木大雜集四

未詳ならずと雖付るに極て尠らざるへし蓋交仗の間一城内の火藥庫碎
飛したれハ其蓋粉をる所夥多なるへし○攻軍の死傷も稍々詳ならびとい
へとも太率英人百人佛人百五十人の死傷と云

煩艇ハ砂礁上ニ滯るを以て一時其用を廢しさり
滿騎ハ曾て其城を攻るふ當て大ニ勇名を顯せし所の者さるふ由て此戰ニ
出さり

尤新の報聞ニ曰英佛の使將將發して天津ニ到らんとし現ニ其預備を爲せ
りと○英佛の兩將分せて北河の兩岸ニ沿ミニストルも此河の中央浜らんと
と云

サキナウ船土賊上海附近停くと云へる新聞を得たり全輩ハハロンコロ
人速ニ大兵を差遣せる設を爲さんと欲せるを知るロルト○エルデン堪用
の舉動を爲さんとして大ニ其意を用ひさるとも支那ニ來せる英師の事も
未タ之を詳ニ知る由無し但シ佛英大ニ不和なる由て數千人事を廢せ

故ニ急に大兵を上海に遣せべきを識る不日英佛の船來り其詳説を得ん事
必せり

尤近水曜日の晚ハベテンを失ひ上海の大ニ繁盛なる一路陷沒セリ

庚申八月四日

横濱書記房

津田真一郎

シーホルトよて本國へ送り候書面之寫和解

日本貨幣一件關章

ヨシクヘール　ヘハエフ　フランシーホルト著

日本と條約せし航海せる國々へ

日本ニ於て貨幣一件

亞墨利加暎咭利佛蘭西和蘭普西亞と日本と取結し條約を首とし日本政府
ハ各港開後一ケ年の間此國々の人民ニ其錢と同意として不足なく引替渡
せるし此規定ハ察るふ新開港の地ニ滯在之外國人を惠まんり爲且ハ外國
人と土人と交易し一般肝要のため互ニ談決せし事なるニ却る世界貿易の

録說中も類例なき一事を招起し處の不覺を引出せし是ハ日本錢の仕組
を知らず隨意にして唯利益を指さる事也同量ふて貨幣引替の規則を見
合としてドルラルと日本一分銀を限りて引替の規則を立て日本政府は
是を強乞せし右一分銀三個にて凡ドルラル錢一枚の量目なぞ同量錢の潔
白なる引替方とせる此仕法ハ我錢則を見合とし或ハドルラル錢及ひ一分
銀を交易品と見る輩の眼ハ廉直正路なぞと見申を然とも日本ハ於て
金錢と銀錢とを割合一と五半にして我歐羅巴の錢則の如く一と十五之割
合ニあらば日本の銀錢ハ都其國帝隨意極めし品價なり夫故諸銀錢ハ
銀にて作らるレシヒス手形或はノードシユント難澀追て設の如キものふ
して漸く銀價三分一のものなり尤金錢ハ凡歐羅巴の價なぞ是等の儀技能
々辨知するをたハ外國交易のため方今開し日本は於て其コンシユルケチ
ラール一分の如キ少價の銀錢を如何してドルラル錢の品價極し基礎とせ
しや今何處かして銀錢と金錢との不當なる割合を知るや如何して自己の

量ふ募たかむるや斯の如くして手短ユートウクル金貸貸て高利とも謂べ
き輩ニ仁惠汝施ハや

前文條之事情を能辨る人ハ必是を驚りん

一我りハへる事を堅めんりため且我明辨ハ廉直なるを示さんりため少量
の銀錢なる一分の最初出來し事を歴史流し明解せんと欲ハ將又方今行
たる、強智ハ輸入商法衰微之基となる汝示す事實を副述し加之本國の
産業被害し日本と條約を結ひし航海せる國々其國譽を汚し且又成行難
計異論之端を開るきを示し事實を著さんと欲を日本を開きし始の類は
輸出商法多分ハ貴金類にして金銀銅輸出計八十二年より千百ミリユ
ンギユルデンハ百萬なり即一百ミリユン小判及べり漸々於日本金
銀拂底となす止事汝得て於政府ハ貴金類の輸出を禁シ其後古小判を小
形ふし終も亦金輸出を禁し銅の輸出も限り汝付しかり銀日本は於て甚
拂底となり重も商賈向も用る丁銀只厚く流銀せし銅を以て代用せり一

分銀を小形よし漸和蘭一キユルデンの品價我有せり然を共其四ヶハ凡拾二キユルデンの金價を有せし小形小判の品價なり故に四箇よて小判一箇の價我保てて

一漸三分一の銀價をもてる少量銀錢をコンシユルゲテラール等條約のケ條に宛行ひドルラルと一分銀と比量する此處置廉直なる旨趣なりと定募居る處のもの即是等より外國錢と比量せんは如何して此小形よせし銀錢を用るよハ至しきドルラル引替の爲免是我元規とせる我得し事如何して成るけんや我是を問ん事我欲せば一分銀とドルラルの引替を條約ふ及び事を發明せしハトムソンハルリスなど一般ふきを言囉せり此ゲテラールコンシユル日本來著之頃當用仕拂の爲め此小一分銀我三倍重キドルラルと引替渡さし此銀少量にして高價なりとたもドルラルの滿量我一分銀三ツ得ん事を強く日本政府ふ乞し日本政府は又コンシユルゲテラールに對し永を重し是我拒キきまじ也

下田神奈川此
迄之應接可想
像嗟々

一然と云へとも航海する大國の交易守護なる右コンシユル貿易肝要としてドルラルを同量の一分銀に引替ん事を如何して日本政府に強乞する事我得しや爰に於て我是を裁判せる我適當とせば又コンシユルと又日本新錢請取事を拒み終つドルラル我一分銀に吹替る事に至り日本政府よ此仕法を以て或る高のドルラルを一分銀と引替る事我商人共へ許せり且又江戸神奈川及長崎に於て外國人の方より多くの加都合無理をなせりと云へとも我是我黙止まへし然も唯はふるにハ金貪商法貨カ即ちドルラル一分銀の引替に困因カて輸入輸出眞實まかしがの商法を害し然も漸々消滅するに至るる事あり

一我爰に於て問ん日本に於て航海する外國コンシユルゲテラールのなせる處置ハ如何判斷して佳ならん哉此處置に因て既に眞實の商法を失ふ道我開きし事明らよして是迄國々の政府人民の得る信義没失せん我はこを事を暗キり故からんと云へんと欲はきとも左にハあらて其見

込の不直あるは因^て且我意^を任せて一度設けし趣向を理かく固保さる
ふ因ておらん斯のふとくして國々の政府もし斯程大切なる事柄の情實
を辨知をばしてゐるときハ恐くハ仇心を發必據所なき戦争ふ押移るる
き異論を起さふ至らん

一航海及交易する國々の自國を愛する賢慮ある人心の人々ハ我念^{今カ}再び尋
問せん少量ふして「ノートシユント」^{見ユ}同様之日本一分銀を同量ふして
不足なくドルラルと引替るるき希望を利發なる趣向ある茂廉直正路を
る所置なる哉將又其國々の權を以て鄙き貪商ふ惑溺する事茂助る事茂
免せんぞ^て自國并屬地の商法こそ殊^に守護をるき職務なるふ上よもハ
ひし如く條約の箇條を立るふ暗して^之我^再ひ又ハ態と設たる趣向を固
保るる右關係ある國々の尊貴并其職務ふ相當なるべし
一我望^はくハ所謂銀錢混雜ニ付當日本^は於て自分交易之所存を離を及公
事^を携らば日本の事情を知る^は任せ永久練磨の眼を以て見極め認し此

書面を航海通商する人々肝要なりと披見し且又我實測經驗を日本と條
約取結し航海する國々の政府^もて心^を付ケ而して右銀錢一件に關係
する政府^もて規則を立て人民の繁榮其國の産業及ひ商法を勸進するの
手當あらん事を祈る

一遠隔の東方よ^て發する我仁聲茂國主人民も聞けよりし

長崎本送寺ニ於て 千八百五十九年十一月廿七日^{未十一日}認之

ヨソクヘールオンシーホルト

右之通和解仕候以上

亞墨利加合衆國全權兼

ミニストル

エキセルレンシー

トウセントハルリス

以書翰申入候李漏生國條約取結之義強^を申請ル品口より許儀之上

大君の言上および候處廣く外國と通商之事ハ先年中其許より被申聞置
 しふと有ルといへとも去ル六日對話之節縷々演説および如くよて開
 港以來國用の物品漸々乏しく士民之不便とあり頗る物議を生し細民或
 ハ其業を失ふにも至せり然るは葡萄牙國之儀も往年證書も渡せしこよ
 り辭せるこ由なきといへとも夫等こ付國內之人心居合其品こより差支
 有之然るこ此上字漏生國と條約を取結ん事も猶更指支ひ少あるは而
 已ならび即今煩^擾計り難く其行をあるさきを知りて枉て其請ひこ應る
 時ハ全く不信の處置ニ涉り敢て安まる所こあらは是等之事情深察せら
 せ兼々懇親之譯を以勘考被致候様存候乍去一^概拒絶せる譯こハあら
 び我人民追々交易の業こ熟し國用送^乏之憂を免るふおよびてハ猶又談
 判こおよび可申候間字漏生國も勿論其餘之國とても即今條約取結兼候
 こ付其邊をも差含まを取扱ひ有之度此度申入候拜具謹言

萬延元年

協坂中務大輔

花押

七月十七日

安藤對馬守

花押

英吉利人四人陸通り富士參詣ニ相越候事

水野出羽守

今般英國ミニストル義豆州熱海湯治并富士登山之義願立御許容相成候
 こ付るこ外國奉行御目附支配向取締として指添東海道筋罷越候間領分
 知行通行中休泊取締も勿論右通行筋諸事心付候様可取計候尤猥こ見物
 之をの道筋の指出間敷外國人之事こ付萬一不慮之義有之候も差縫可
 生も難計左こるこ其筋之者指添こ候得共遠路之事故猶取締之手當別
 入念可申付候休泊其外要用之儀も外國奉行承り右總も不都合無之様取
 締可申候事

此度唐國賊亂之爲蘇州落城致し私妻子トモ難ヲ避ケ御當地の遁來
 候こ付右之模様左こ申上候事

當夏四月四日南京之逆徒蘇州を取巻城外民家ニ火を付け逆焰を舉候處
守兵ニ防戦之心なく官貴ハ唯遁ケ支度致候のミにて禍旦夕ニ迫リ城中
騒動不大方賊等ハ城外ニテハ七八日之間肆ニ亂妨致し城中動靜を伺候
内官兵不戦して落失せ巡撫官一頭之外町人百姓のミ相殘リ居候處同十
二日賊徒昂然と城中ニ亂入致し巡撫を殺害致し城門ヲ閉テ切リ官府町
家ニ有大家富室^{室カ}を選ミて劫掠致し同十三日十五日迄擄殺止時かく婦
女之美なるをハ一家之内ニ致幽閉兵ニ守らせ初メ賊ニ隨ひ往ざるもの
ハ汚辱殘害せらるゝ由ニ付賊の不來内ニ迎自縊死投水して節ニ死むる
者却る夥敷種々の慘毒譬へいふべきなし同十六日朝賊首忠王なる者安
民之牌を張出し此度當城平略之義を民を凌虐する濫官を除き百姓を安
むる主意にて殺伐を事とむるよあらば今日か始凡之軍兵共若百姓を劫
殺シ婦女を擄淫むる者あらハ斬罪ニ行ふ爾等諸民驚恐むるよ不及其老
幼并婦女之輩他所ニ引越者あらハ可爲勝手旨ニ有兩三日之間城門を開

きたり百姓ハ城中一時ニ穩ニ成たるを見て忠王之仁心と思ひ却て道途
之難を恐れ安然として走ラサル者多し其内紳士庶民之差別なく健壯な
る者を悉ク引留先ニ踏潰したる官府町家之所ニ有之貨財を不殘抄收シ
一ニ米穀二ニ金銀三ニ布帛并衣服衾褥之類山之如く積立士庶を呵責し
て楓橋迄荷ひ運ハセ船ニ積南京之本城ニ移し入同廿六日所々ニ論文を
張出しいひつるハ當月廿八日英王當城ニ著陣なり汝等善良之庶民罪な
くして殘暴を被る事尤憐むニ絶たり依て今日より明日迄ニ立退へし汝
等遲滞して英王至らば忠王蒼生を愛惜せんと欲むる共得るあらばと蘇
城六門を大ニ開き百姓を放出し抑此英王とハ専ら殺戮を司とり至る處
老幼病衰之者并婦女を見れば必是を殺し壯年之士民ニ至りてハ彼ニ從
ふ者ハ生き逆ふ者ハ死を依て備城之士民老を携へ幼をつき洪水の流を
出る如く晝夜となく遁命致候處途中ニ有ハ別ニ草寇土匪有之行李錢物
を奪んとて逃民を切散シ此時老弱溝壑ニ轉ひて死むる者其數を知らば

父母兄弟妻子離散シて死生存亡更ニ問ふるき方もかく哀なる事共ニ有之右ニ付錦繡之城地俄ニ荒墟と相成王氏十二家荷主初坐方一統仲ケ間ニ家族共何をも瓦碎萍散して行方相分らば此ノ荼毒を蒙リ候情景聞モ不忍事計ニて筆紙ニ盡難申候尤蘇州之危急并落城之儀共追々京都へ注進致シ早速救援之催シ可有之處其頃異國船數艘天津に攻寄候ニ付彼是事多く段々手延ニ相成候得とも無程奇計を以數艘討取十分之勝利有之候故其雄兵數萬を引率して魯斯亞之兵を隨ひ急キ江南に馳向ひ烏合之小寇剿滅可致との嚴令被申渡候由ニ候處私家族共上海に致出船候頃迄ハ京軍彌進發ニ相成候段駝と不承尙又同月十四日十二家宏豊船乍浦に著船之處同所之土匪蜂起シ鎮官を殺害シ人家を搶劫致候ニ付宏豊ハ積荷之儘乗出し寧波^{波カ}に遁去候由樂士^王吉利并吉船ハ同十五日上海十里日本里數之外吳淞口に著船之處上海諸問屋何をも門戸を閉荷物引受候者モ無之候ニ付一船之人數今ニ吳淞口ニ致滯船居候斯てハ商賣方も此後如

何成行可申哉且上海之地ハ銀兩を以佛蘭西人ヲ相頼賊亂防禦爲致候トイヘ厄爵祿を以テ被養置候官吏さへ難ニ臨ミ命を惜む世態ニ候得て利を以テ交る外國人共如何して賊ふ向ひ血戦して可相防哉是亦萬全之計ニ無之此上何等之珍事相發リ候哉も難計誠ニ以危キ次第ニ有之抔致評判候由ニ御坐候此段以書付奉達 尊聽候明鑑被成下度奉願候以上

申五月

十二家船主程稼堂

右書付候通和解仕指上申候

後文之趣意至極尤と被存申候同種同血類ニる親義共ニ深き近き者共を捨之怒恨を懷候様ニ至る迄成し懸隔之夷種異類之唯利のみを以親疎交情と仕候者共懇意助勢ハ無覺束處分明と被考候以上

日本在留ハイレフリタニヤマイーシタイトの特派公使兼全權ミニスト
ルトセルトアールコツク

外國事務宰相台下ニ呈す

千八百六十年三月二十九日江戸フリタニヤ使臣館ニ

余本月二十四日の朝セーテエキセルレンシー御大老井伊掃部頭武器を
帶したる一隊の者ニ暴襲され且劔傷を蒙られたりと聞て大ニ痛免り余
懇切ニ台下ニ左件を願ふ右不幸の事件ニ付て切ニ深く痛心せむ情を其
劔傷の速ニ快復せん事を思ふ余ニ熱焦せる志願を報告せらるれハ幸也
余醫學を心得又外科の實驗あり御大老ニ余ニ醫術を其手當ニ供へ余を
して何時ニても之ニ爲ニ側ニ至らしめんと欲せハ余ニ於て満足せり台
下又是を余ニ書送らむ事を願ふ恐惶敬白

日本在留ハイレブリタニヤマイーシテイトの特派公使兼全權ミニス

トル

リュセルホルトアールコック

ハイレフリタニヤコイルテイトの現住ワイスコンシユル

エルエーステン正譯

申三月十二日對馬守殿へ上ル十三日差遣

太貌利太尼亞格外公使全權ミニストルエキセルレンシールセルホ

ールトアルコック

貴國三月二十九日付第三十三號之書翰落手セリ

今般井伊掃部頭登城掛ケ不慮の禍ニかゝり其許ニても深悲歎せらるゝ
由見舞被申越且療養等ニ付てハ格別懇篤の情を表せらるゝ趣厚ク忝く
存され共公事ニあらずして其許を煩さん事憚あれハ來訪之義ハ堅ク斷
ニ及度されと心を用らるゝの深切あるハ掃部頭ニも深く謝する所也此
段答書如此候拜具謹言

安政七年申三月

御兩名花押

英國新聞紙鈔譯

千八百六十年五月十二日發行

我從ニ於てハ王國日本の執政官三月廿四日三日大君の城内ニ出んと

し水戸公之從臣私黨の一隊は侵され大不幸ニ遇ざるを今日迄甚疑ふり然も其日本の權官等も在てハ執政の性命も既ニ危き重傷を受ケ其死を秘するを知り疑念おし近日日本ハ新説を得るも執政官大君を訪んり爲橋子ニ乗臣下の大隊を去て其周圍を警衛セシメ大君内城の門前ニ架る大橋ハ大約三分一里を隔たる自館を出て途ニ在り進んで岐路の相會する所ニ到り方ハ橋を渡らんとて天偶雪を降も十六人ハ十八人の兵士表ニ雨衣を著し裏ニ戎衣を服し直ニ雨衣を脱し急ニ執政の黨を犯し敵する者ハ盡之を伐劔を以て公の轎子を圍ミ之を刺も遂ニ公の首を切ル其一人首を提けて衆中を通る又一一人從臣の首を切り之を提て叫て云今我公の首を得ふりと蓋執政の衆臣を惑ハせめんり爲なり首を提たる者一の大門ハ遁出ふりまハ衛士之を咎る者おし翌朝衛士其任を怠たるの故を以て命えて自殺せまむ私黨の兩人此事ハ由て糾明せらる自餘ハ僅ニ捕へる者二人ハ過ズ此變事の後兩三日を経て執政の從臣一萬人戰

關の具を携へ江戸ニ來著まると云

日本の武器ハ皆重くして戰鬪ハ疲勞をへし其具足の製ハ鋼鐵ニ漆を塗り美麗ニ裝ひふり甲假面胸板背板にて編成シ以て體外ニ飛來する害物を防く其全量極て重シ甲のみにて四封度ニ至ル一封度我百二十目なる江故ニ五百四十目なり江戶在留の外國ミニストル居住所毎夜嚴戒なり是外國人ハ害なく且自餘の諸物を燒さる事を注意するが故なるべし實ニ頗る恐愼せると見へり不列顛ミニストルユツクの羈臣傳を殺害したるハ水戸公の從臣あるべし傳此時外出するを告ぐ又暴行する事あるべしアールコツクも甚恐怖し日本人も尙検査せりアールコツクの廉直ある面目實ニ十分とて日本人能く注意せしと見へふり日本の鎮臺等不列顛の全權ニ約せる馬の數を滿るものを拒たり江戸にてハ鎮臺等千疋の馬を送らんとしへり然もとも馬ハ皆諸侯の領地より出せハ彼等馬を出るを背せざるを以て鎮臺も前約を變し通する策を設けふり横濱の鎮臺其府の要用の爲メ

異人の貯たる火器を買んと欲し目錄を異人よ托して之を求め此銃を以て兵士等前月標的を建て之を照準シ點火して操練せり

横濱鎮臺之命ニ由て

手塚 律 藏謹譯

乍恐奉申上候

一井伊様よて討留ニ相成候浪人者懷中か水戸老公之御自筆今度之手當として金拾五兩遣候と有之由風説仕候共是ハ水戸老公を御惡み申候者作り言よて決て御信用不相成義と奉存候此度之事若シ老公御承知ニ御坐候得ハ水戸家安危ニ懸り候御譯ハ三ツ子ニても分り候理ニ御坐候得ハ凡十七人之者共討死を覺悟可有之ハ勿論ニ候間死骸之中か右様之書付出候てハ主家之滅亡ニ至候事何も承知ニ可有之然る處證據ニ相成候書付類懷中仕候事必定無之事ニ被存候且又十七人之内八代洲河岸ニて自殺もの二人脇坂様ニて深手ニて相果候もの一人有之處其懷中か老公御

出候ノ下一行
程も脱候申定
伊出で打申井
者之懐中か出
歟杯ニ可有之

手當金之書付出候事第一不審ニ御坐候老公之御書付を大切ニ存シ肌身を不離位之もの銘々懷中可致事無御坐候且又老公も書付添て賜り後日之證據ニ成候様之事ハ萬々被成間敷候筈ニ御坐候一體其場之傷死人總て檢使を不申請直ニ屋敷へ引取其後懷中か書付出候様申觸候もの彦根藩人重々不埒至極ニ御坐候間是處嚴敷御詮議可被爲在義と奉存候
一十七人之もの共亂妨と可申候得共内八人尋常ヨ自訴仕候同意之者姓名申上御大法相待候程之者ニ候間其外水戸表ニ罷在候同志之もの或ハ上カ被申付候哉杯之御吟味ハ御無用之義と奉存候籤をせつて蛇を出せと申世話ニ申候通り餘計之御吟味有之時ハ水戸ニ残り居候勇士忠臣之氣を動し却る事を生し候様相成可申候扱右之御仕置ニ至り候てハ尋常ニ自訴仕候廉を以る磔刑ニ可被行を獄門と申位ニ御不惑を被爲加一等を被減出格之 御仁惠を被相示候様御坐有度奉存候事ハ少々相違候共亦穗四十六人御預ケ中一度も評定所御吟味も無之畢竟自訴いさし御大法

を相待候者共ニ候得ハ固カ事明白ニ相分候始末ニ付御吟味不及故と奉
存候切腹之節も陪臣之切腹ニハ檢使を不被爲付御定法之處御直參同様
ニ御徒目付等檢使被下候もの不届とハ乍申其主人へ忠義を盡候所を以
て御定法ニ御斟酌付候義と奉恐察候晉之謝安リ事を陶侃稱美して謝公
ハ法外之意を得たりと申候總て法ニ拘泥いさし候ハ凡俗之役人ニ御坐
候法外之心持を以て刑人之情實を察し候所置を謝候處誠ニ仁義を盡
と可申候此度之一件法外之心持を以て御處置無之亦ハ永戸御一家のみ
ニ無之天下之士氣を損し終ニ御武運之損し候様ニ相成可申哉と奉存
候

一去ル二月廿二日水戸様々出奔御届出候高橋多一郎林忠左衛門等數人ハ
三日之事ニ加リ不申當中納言様ニハ相背候得共御國を厚く思ひ候所ハ
忠憤ニ有之へく候間召捕ニ相成刑法ニ被行候てハ惜きもの共ニ御坐候
外夷御氣遣最中の世の中右等之もの共被爲助非常之節被相用候ハ、拔

群の勇戰可仕もの共ニ御坐候最早嚴敷御穿鑿被爲止候様有之度奉存候
一 一橋様を御養君ニ被爲遊候様有之度と企望ニハ外夷之事御心配之折柄
御年長にて英明被爲在候御方様何卒將軍家ニ御備り被遊候様御坐有度
と仰望仕候就ルハ刑部卿様兼て御聰明にて御家門様方之御中にて御年
長ニも被爲在候ニ付世上人望之歸候事ハ七八年以前カ之事ニ御坐候
公方様 御養君被 仰出候後刑部様を御入申度と謀候ハ不届ニ御坐候
得共其以前カ企望仕候ものニ於てハ更ニ惡意ニハ無御坐と奉存候殊ニ
福井侯ハ阿部伊勢守様御勤役中カ其事頻ニ被仰立候由分明ニ御坐候と
奉存候人之不仁惡之已甚亂也と聖語ニ有之通り不仁之人にてモ甚敷之
を惡み候時ハ窮鼠却て猫を噛み候道理にて禍亂を生申候まして不仁ニ
無之者を嚴敷取扱候時ハ禍亂を求め候事ニ相成申候尾州中納言様御隱
居被 仰付攝津守様御本家御相續被仰付候節御對面ニ不及と被仰出候
杯ハ乍恐父子と御定り候間を 台命を以御隔被成候様相聞へ御政體ニ

於て恐入候事ニ奉存候依之一橋様御始水戸前中納言様尾張前中納言様松平越前守様一同御慎御免被仰付候様有御坐度奉存候
一權現様ハ上杉浪人車丹波上を規候ものニ御坐候とて露顯之後一命御助被成候のみニ無之乞食頭被仰付格別之御大量凡慮之及所ニ非之と申候得ハ火附盜賊之類之極惡人と違ひ其主人ニ忠義有之者ニ候得ハ法外之意ニて御手心可有之義と奉存候扱水戸御家來安島帶刀茅根伊豫之介越前様御家來橋本左内等ハ世上ニ稱し候程之者ニて主人ハ忠義ニ相違無之候間大法ニて御仕置被仰付候ニて御斟酌之御手心被爲在度と奉存候然る所帶刀切腹被仰付と申條牢屋敷ニて非人首を打候由ニ御坐候得ハ打首同様之御刑戮ニ相成候由元來御仕置附者三奉行様御伺ニ相成御老中様ハ二三等も軽く御指圖御坐候由承及申候然る所帶刀等仕置ニ限り御奉行様御伺ニ相成候處二三等罪重く御指圖御坐候由右様私意を以テ法を御枉被成候てハ人心不服之筈ニ御坐候依之帶刀

等御仕置一件ニ付遠島追放押込相成候もの共二三等も御仕置御宥免ニ罷成候様有之度奉存候

一今度之一件ニ付御役人様方御用心被遊御供被爲増候義ハ御無益之事と奉存候專權第一の御方をこそ目掛候義ニて既ニ本望を達候上ハ何程狂妄のものニ候とも外御役人様へ對し亂妨ニ及候義努々有之間敷譬ハ人を斬り止め刺喉を突候上ニ手の脈處腹の急所足之脈所迄刺候馬鹿者ハ決て無御坐よして御役人様方之御中少しくも水戸方御怨を御受被成候御覺不被爲在候御方杯ハ尙更之儀ニ御坐候若御役人様へ不殘狼藉ニ及候節ハ公儀を御恨申上候ニ當り候間水戸家之御安危ニかゝり候道理ハ的面ニ御坐候是しきの事は常陸士共勘辨いさし候事ハ必定ニ御坐候乍恐掃部頭様御怨申事ハ數多可有之御役人様方御努々御氣遣不被爲在候

一掃部頭様御黜被成候方々板倉周防守様大久保右近將監様鶴殿民部少輔

様土岐攝津守様淺野備前守様岩瀬肥後守様川路左衛門尉様黒川嘉平様
御始世間評判之御方様ニ御坐候就中板倉様ハ御家政向御拔群ニて中國
邊ニて有志之者ハ御稱美不仕者ハ無御坐候由然る處水戸様を御惡被成
候より曖昧之情を以御退役等被仰付其外御黜被成候義乍恐御私意無之
トハ被申間敷候御私意ニて人を御黜被成候てハ衆怨之集り候筈ニ御坐
候


一掃部頭様御事

禁廷を輕蔑被成 天子之御舍弟様御始近衛様等大臣方公方様ハ御位重
キ方を塵芥を吹如く御取除被成右ニ付るも一昨年以來刑戮ニ相成候五
六十人之内天下有名之學者も有之一藩ニ臣ト被呼候者も有之多くハ隱
刑を蒙り申候依之天下有志之者ニ於てハ盡く切齒憤怒罷在候水戸侍も
此所を第一ニ憤り此太平之御代ニて右様罪人夥く出來候事權現様以來
無御坐候古語ニ人盛勝天天定而亦能勝人と申候扱掃部頭様御盛之時暴

虐を縱ニ被成候人盛よして勝天之勢ニ御坐候所有志之者ハ何を天定而
人ニ勝候時可有之と内々申居候處夫故三日之事を承り水戸之勇士快能
事をいさし候と喜候もの餘多有之候右様怨憤之集り候掃部頭様御一人
ニ止り候間外々御役人様方努々御用心ニ不及義ニ御坐候

一 天保之時ニ鄙賤之者御役人を怨み申候迄ニ御坐候間御敗ニ相成候時石
擲ニ止り申候此度之義ハ有志之士憤怒ニ不堪候間刃傷ニ及ひ申候怨甚
敷時ハ怒ニ至と申候此度之義ハ御坐候然も此節水戸表ハ御府内へ御家
中出候事殊之外六ヶ敷被仰達彦根ハ武器人數夥敷參り候事ニ御坐候得
共一向御構無之段御偏頗之様有志之者存申候大學ニ其之所哀矜而辟焉
其之所賤惡而辟焉ト有之通り水戸様之方ニハ其賤惡なる所ニ於テ辟
るの御氣味有之候此度之事御處置次第ニて治亂之界ハ相成候間公明正
大無偏無頗之御沙汰ニ及候様所仰望ニ御坐候

右申上候内ニハ道路之流言等交候事實相違候義も可有之事ニ御坐候

得其下情之趣御聽ニ奉達度思召をも不相願乍恐言上仕候以上 

異事

日本軍艦當港へ著船之次第其指揮役其外役人上陸之事サンフランセシ
コ都ノ役人等アタムラール木村攝津守ニ應對并日本人市中徘徊之事
一金曜日ニ新聞書ノ刻所ニ至リ望ムニ日本人捻仕掛ノ蒸氣船灣内ヨリ港
内へ乘來リ居ル其様中柱ノ上ニ國印シ總白ノ真中ニ朱丸アリ又艦柱ノ
上ニハ白キ五角ノ赤丸ノ旗アリ是ハアダムラールノ旗ナリ右軍艦ハ極穩
ナル走リ方ナレドモ日本大帝國使節ノ乗組タル船ヨリモ先へ來ル後船
ハ彼國二月十一日出帆合衆國ノ蒸氣軍艦ホーハタン船ニテ來ルヨシ船著
ヲ日々待居ル又捻仕掛蒸氣軍艦感臨丸ノ我國ニ來リシハ彼國最初ノ船
ナリ但シ日本ハ鎖國トシテ他國へ船ヲ出ス事ヲ許容ナキト有シニ實希ニ

珍ラシキ事也此船ホーハタンノ著スル迄待合セ居リ而テ使節ノ著セシ左
右ヲ以テ歸國ナストイフ其船中ニ合衆國船將フロツク并ニ役人カン水
主九人ハ合衆國ノ小船ヘ子モハクワ名船ニ屬シ數ケ月以前ニ日本海濱ニ
テ破損セシ者トモナルニ此度便船セラレテ乗組致シ水夫ノ助力ヲナシ
ナカラ當所ニ來ル日本軍艦感臨丸ハレ、ヨマチ町著船場ノ沖へ日暮前ニ
碇泊ス當港市中ニ於テ珍ラシキ事トテ遠見群ヲナス日本軍艦感臨丸ハ凡
ソ三年程以前ニ大日本帝ノ爲ニ阿蘭陀國ニ於テ製造シ解數オランダノ
二百五トン價ドラー七万枚其大砲ハ船ニ過テシーユエフル名砲四挺ホエ
ツチャ同一挺モルチル一挺三十二ポント六挺十八ポント四挺ヲ備フ此
船ノ司ハアダムラール前文ニ云フ長キ名ノ人船將勝麟太郎此人ハ大旨航海中不快
キャブクン萬次郎助役ルテナント佐々倉桐太郎オキヨモシ勇平勇次郎
小野友五郎岩吉蒸氣器械頭取肥田濱五郎古瀉健次郎蒸氣部屋役人四人
醫者三人水夫七十人ナリ但石炭ハ九日分積込ミ蒸氣ヲ用ルハ船山ヲ去

ル所迄トイフ航海中ニ濕氣ニテ悪キ天氣ニ出合フトイヘドモ終ニハ快ク悠々ト凌キ其中或日一日帆ニテ彼二百里走り著後ニ於テ亞國ノ水夫共へ航海中助力ノ骨折代トシテアダムラール木村攝津守ヨリ立派ナル金ヲ與フ而ノ昨日數多ノ役人日本船ニ參リ又今日モ同様數人參ル其推參ノ者ハ日本人ヨリ叮嚀ナル挨拶ヲ受ケ喜ビ斜メナラズ此時日本船中ノ水夫ドモニ於テハ推參ノ人ヲ珍ラシキ風俗ト思ヒ又亞人ノ方ニテモ船中凡テ珍ラシク見エ水夫ハ奇麗ニシテ健ニ働キ且頓智ヨク悟リ早ク船ハ規則正クシテ奇麗也又船中乘組亞人ノ説ニ水夫ハ遣ヒ能クシテ働キ宜シ去ナカラ海上ニハ不鍛鍊故カ日本出帆最初ニハ交代當番ノ役割ナク而テ風雨ノ夜トイヘドモ船足ヲ留メ居ル時ハ危難ノ思慮ナシ併惡シキ天氣ノ續ク故ニヤ乘組一同多分ニ疲勞ス彼等皆能ク此度ノ事ニ就テ乘船ノ法則ヲ覺ユ又船中ニ於テ見ルニ佛道ノ拜禮ニ似タルモノ更ニ無シ而ノ役人方一同ノ衣服ハ黒キ絲ヲ以テ撚リタル羽織ニテ裾廣キ袴ヲ

著ス是モ亦同シ類ノ品ナリ履物ハ美麗ニテ寛カナルサンタル履草ヲ履キ又端物ノ切ヲ以テ羽織ノ肩ト肩トノ間ニ付タルモノハ役號并ニ官職ト見ユ人々皆替リテアリ亦役人一同ハ塗物靴ナル刀ヲ二本ツ、差シ用ヒ又一同頭ノ毛ハ念ニ懸ス價ヲ不論シテホメツン鬘油ヲ用ヒ頭上ニ撫テ揚ケ結ビ置ク凡テ其人々ノ衣服ハ清朝人ノ福貴ナル者ノ服ニ似ルトイヘドモ亦亞人ノ風俗ニモ少ク似タリ亦アダムラールハ頭上ヨリ足ノ指先ニ至ル迄貴人ノ相貌アリ彼ガ官職ノ威光ト見エテ數多ノ家來ヲ仕ヒツ、日ヲ暮ス其家來ノ者へ何カ命ズル時ハ頓首シテ令ヲ受ケ又下輩ヨリハ直談ナク重役ノ者ヨリシテ取次キアダムラールへ申シ通ズ故ニ船中凡テ規則正シキトイヘドモ惜キカナ諸役人并ニ水夫ドモ一同ニ蘭語ヲ用ヒタリ按スルニ日本人ノ食料ハ米并ニ魚ハ胡麻ノ油ニテ煮揚ケ食フ野菜物ハ乾シ并ニ漬物ニス又茶砂糖モ好ク用ユ亦粘ノ如キ柔カキモノモ堅キ物モ能ク馴テ自由ニ箸ヲ以テ喰フ又食スル臺及ビ腰掛等ハ日本

人ニ於テ不用ノ故カ其器ナシ乗組便船ノ亞人ハ船將部屋ヲ借り請ケ馳走セラレ亦アダムラール木村攝津守ノ居間ニハ合衆國ノ大棟梁ブカナン人ノ像ヲ紙ニ寫シ懸ケアリ金曜日ノ夕暮役人ノ内數人上陸ス併シナガラ高官ノ者ニハ無シ彼等キヤフ。ロツク名人并ニ其人ノ朋友ニ市中ヲ案内セラレテ歩行シインタテシヤトイヘル茶店ヘ參リ其所ニテ料理ヲ食ス其者ハ汁肉及ビ鳥類種々ノ品ニテ氣味惡ナガラモ能ク喰ストイヘドモ亞國ノヒ熊手等ヲ箸ニ替テ持用ル所ニ至テハ馴レザルノ故カ小兒ノヒ熊手ヲ持扱フ如クシテ笑カシ其後時刻過テシヤウフトイヘル菓子屋ニ參リ亞人ノ喰スル雪菓子ヲ食ス雪菓子ハ氷ヲ卸シテ砂糖ヲ交ヘタル物ナリ而シハバイジャ役ヤン名人并ブロツカン名人ト此兩人インタテジヤナル茶店ニ於テ待受ケ面會ス時ニ日本人市中ヘ格別ノ禮ヲ述べタリ

都ノ役人應接之事

一日曜日ニ於テブラジタント役名チシメカ名人シババイシヤ役名ヤン名人ガイ名人

テナン名人ブロツク名人其外都シンセシンラフカノ役人相揃ヒ日曜日ナリトイヘドモ禮ヲ厚クシテアダムラールヘ推參シテ到著ノ祝ヒヲ述ルトテバツーラニ乗組至リシ時日本軍艦ニ於テ立派ニ祝炮ヲ發セリ故ニ又此方ニテモアダムラールノ爲トシテ祝炮ヲ發ス其後上陸ノ儀ヲ進ム此談判密ニシテ法談ノ如シ是ハ日本人ヘノ應接ヲ禮儀正シクスベシトナリ良暫シテアダムラール著服ニ及ブ按スルニ此間脱文アリ終ニ木村攝津守ニ告シメテ云クチャメシカハ都内ノ高官ノ者ニシテゲータ名人ハ我ト同官又ヤン名人并ニテナンモ同シトイフ是ニ依テアダムラール終ニチャメシカ名人ト同船シテ上陸ノ事ヲ許スガイタ名人其外人ハ別船ニシテ上陸ト決ス又シユババイシヤ衆ハ日本ナレバ二本帶刀ノ役人ニシテ其カハ皆家來同様ノ者ハ各陸ニテ待受ルヨシヲ告ゲ知ラシ其後尙又殊ナル催シヲ告テ上陸ノ事全ク決著スアダムラールトチャメシカハ同船其餘ノ家來ハ別船シテ八ツ時ニレ、ヨトイフ船場ヘ上陸夫ヨリアダムラールトチャメシカ二人

ハ同列ニシテ車駕籠ノ待受所マデ進行、マタ其餘ノ者モ跡ヨリ上陸シ是
 又同シク別駕籠待受所迄ヲ歩行ス。此駕籠ハ日本人ヲ重ク取扱フ爲ノ設
 ケニシテ其所ニ至レハ直様駕籠ヲ走ラシテイインタ子シヤナル茶屋ヘ招
 ナシテ客ノ間ニ案内シテ通辯官ヲ以テ種々ノ談話ニ及フ其間ニカブナ
 位名ニテカリホ子ヤト子名市中ニ出張シテ有シカ早クモ此茶屋ヘ來ル但
 國ヲ支配スル者也
 シ日本人ノ存意ニハ斯ク輕々シク無官ラシキ者カ此國ノガブナ名役ナラ
 ントハ思フマシサレト若シ異ナル事アル時ニ守役ノ軍勢ヲ引率シテ正
 シクシテ來ラハ其官職ハ知ラルヘキナリ扱ガブナ名役ハ只一人シテ來リ
 ナガラモ亞人ハ皆重ク取扱フ而シテ後初對面ノ應接モスミテ後ハガフ
 ナトアタムラールトハ互ニ快氣面前ニ顯レテ坐シ居レリ其後アダムラ
 ール通辯官ニ告テ御船^{威臨}ヲ修復場ヘ乘廻シテ損傷ヲ改ル事ヲ乞然ラ
 サレハ安堵ナシ難キヨシヲ告ク而シテ酒宴數獻之後茶店ヲ出ルニ一同以前
 ノ如クニ駕籠ナリトイヘドモ別テアダムラールトガブナトハ同與ノ駕

籠ニ乗シマンタゴミレ町ヨリブライセヘンノ表立タル茶屋ノ近邊及ヒ
 寺々ノ境内ヲ通り抜ケテ蒸氣船製造場ニ至リ珍ラシククンシヨボレシ
 船トイヘル蒸氣船ノ新造ヲ見物スレンコン岳ニ登リテ美ナル山川ヲ望
 マシム其時日本人何ヤラ詩歌ノ如キモノヲ誦ストイヘトモ堅クシテ解
 シ夫ヨリ又亦車駕籠ニ乗シテウヘ町ヲ通行ナシテ都府并港内ヲ眺望シ
 ナカラインタチシヤナル茶屋ニ戻リ晝飯ヲ食シ夜ニ入りテ茶店ヨリ船
 乗場迄ノ所ヲ行列正シク行クニ日本ノ提燈ニテ美麗白晝ノ如クシテ夜
 五ツ半時ニ歸船ス

日本人ノ續キ

正九ツ時亞米利加ノ國印シテ日本蒸氣軍艦^{威臨}ノ表柱ノ上ニ引上ケ合
 衆國ヲ祝シテ廿一發ヲ放ツ又引續キアルカソレ一シ島^{此所蓋ニ於テ日}
 本ノ國印シテ引揚ゲ返禮トシテ同廿一發ヲ放ツ今晝後日本ノ役人キヤ
 フクン^{タカ}名役フロツク名トメシタカン名^{此人ノ名ニ依テカーニ河ト}同道

シテ船造リ場へ往ク彼等皆其事ニ志シ有ル者共ナリ暫クシテ日本人ニ
 ツニ別ル。但シ其一ハ右新造船ノ器械并ニ材木ノ大小ノ寸尺ヲ測リ取ル
 定メシ日本ニ於テ船造ノ諸道具等アラバ此新造ニ似タル船ヲ造ラン志
 シニテモ有ヘシ又彼等シヤンフランセシコノ器械所船造所鐵ノ細工所
 等ヲ一見セン事ヲ乞フ問答ニ云日本ニテモ追テハ右様ノ船ヲ製ナサン
 其時ハ却テ亞人ヨリモ宜ク製造スベクト思ハル、ナリ又日本人ニ珍ラ
 シキ咄シアリシババイシヤ衆ヨリ入湯へ案内ヲ催ス是ハ彼國人永ク航
 海ノ勞レヲ休ンカ爲ニ案内ノ時ニ至リ日本ノ役人は是ヲ辭シテアタムラ
 ール木村攝津守ノ入湯ノ後ナラテハ參リ入ル事難シトイフ禮義正シキ
 國ト知ラレタリ又日本ノキヤブタンハ立派ニシ勇々敷キ姿ニシテカナ
 ル亞人フリマンタ名人ニ能ク似テ唯彼カ眼ハ黒ク勝レタレド口ハ少シフ
 リマンタヨリモ劣リテ見ユ。又アダムラールハ船乗水ニ一ノ數ニアラス
 國ノガブナカフナ支配スル奉行ナルヘク思ハル、ニ此度ハ右役ヲ蒙リ亞國ノ

カマトーウニ比スル者故ニ差越シタリト見
 明日ハ日本人亞國ノ蒸船ニテアルカツレー島産場ニ參ル由其時ニ至リ
 日本人ノ諸人見物ノ儀ヲ早々ニ定ム。
 右ハ亞國新聞書ノ儘ニ候間名面不順等有之候

咸豐十年九月十五日内閣奉

上諭恭親王奕詝奏互換和約一摺本月十一十二等日業經恭親王奕詝將八年
 所定和約及本年續約與英法兩國互換所有和約內所定各條均著遂款允准
 行諸久遠從此永息干戈共敦和好彼此相安以信各無猜疑其和約內應行各
 事宜即著通行各省督撫大吏一體按照辦理欽此
 續增條約

茲以兩國有所不愜

大清大皇帝與

大英大君主合意條好保其嗣後不至失和爲此

大清大皇帝特派和碩恭親王奕訢

大英大君主特派內廷建議功賜佩帶額等寶星會議國政世職上堂內世襲額羅金並金額爾里郡伯爵額爾金公同會議各將

本國恭奉

欽差全權大臣便宜行事之

止論等件互相較閱均臻妥善現將商定讀增條約開列於左

○第一款

一前於戊午年五月在天津所定原約本爲兩國敦睦之設後於己未年五月

大英欽差大臣進京換約行抵大沽砲臺該處守辨阻塞前路以致有隙

大清大皇帝視此失好甚爲惋惜

○第二款

一再於前々戊午年九月

大清欽差大臣柱瓦納花沙納

大英欽差大臣額爾金將

大英欽差駐華大臣嗣在何處居住一節在滬會商所定之議茲時申明作爲罷論

將來

大英欽差大員應否在京長住抑或隨時往來仍照原約第三款明文總候本國

論旨遵行

○第三款

一戊午原約後附專條作爲廢紙所載賠償各項

大清大皇帝允以八百萬兩相易其應如何分繳即於十月十九日在於津郡先將

銀伍拾萬兩繳楚以本年十月二十日即英國十二月初二日以前應在粵省分

繳三十三萬三千三百三十三兩——內將查明該日以前粵省大吏經支填築

沙面地方英商行基之費若干扣條入算其餘銀兩應於通商各關所納總數內

分結扣繳二成以英月三個月爲一結即行算清自本年英十月初一日即庚申

年八月十七日至英十二月三十一日即庚申年十一月二十日爲第一結如此

カケ目十ス此節
一兩ト六十六
洋銀千六百三
改圓ニテ我金ニ
十九萬六千三
如程ニ當ル大略

陸續扣繳八百萬總數完均當隨結清交

大英欽差大臣專派委員監收外兩國彼此各應先期添派數員稽查數目清單等件以昭慎重再今所定取價八百萬兩內二百萬兩仍爲住粵英商補虧之款其六百萬兩少裨軍需之費載此明文庶免禁糾

○第四款

一續增條約畫押之日

大清大皇帝允以天津郡城海口作爲通商之埠凡有英民人等至此居住貿易均照經准各條所開各口章程比例盡一無別

○第五款

一戊午年定約互換以後

大清大皇帝允於即日降諭各省督撫大吏以凡有華民情甘出口或在英國所屬各處或在洋別地承工俱准與英民立約爲憑無論單身或願攜帶家屬一并赴通商各口下英國船隻毫無禁阻該省大吏亦宜時與

大英欽差大臣查照各口地方情形會定章程爲保全前項華工之意

○第六款

一前據本年二月二十八日

大清兩廣總督勞崇光將粵東九龍司地方一區交與

大英駐紮粵省暫充英總局正使功賜三等寶星巴夏禮代國立批永租在案茲

大清大皇帝定即將該地界附與

大英大君主並歷後嗣并歸英屬香港附并以期該港埠面營轄所及庶保無事其批作爲廢紙外其有該地華民自稱業戶應由彼此兩國各派委員會勘查明果爲該戶本業嗣後倘遇勢必令遷別地

大英國無不公當賠補

○第七款

一戊午年所定原約際現定續約或有更張外其餘各節俟互換之後無不尅日盡行毫無出入今定續約均應自書押之日爲始即行照辦兩國毋須另行

御筆批准、惟當視與原約無異一體遵守、

○第八款

一戊午年原約在京互換之日

大清大皇帝允於即日降諭京外各省督撫大吏將此原約及續約各條發鈔給閱并令刊刻懸布通衢咸使知悉、

○第九款

一續增條約一經蓋印畫押戊午年和約亦已互換須候續約第八款內載

大清大皇帝允降諭旨奉到業皆宣布所有英國舟山兵立當出境京外大軍即應啓程前赴津城並大沽砲臺登州北海廣東省城等處應俟續約第三款所載賠項八百萬兩總數交完方能回國抑或早退總俟

大英大君主諭旨施行、

以上各條又續增條約現下

大清大英各大臣同在京都禮長衙門蓋印畫押以昭信守、

大清咸豐十年九月 十一日

大英一千八百六十年十月 二十四日

英吉利與暹羅條約

大英君主

暹羅君主

二王咸有意堅定兩國彼此友睦和好不絕且欲將彼此兩邦民庶貿易暨各工修藝業勸勵安撫俾得順適優逸而整飾措理以握兩國民人要鉅可以永保無虞同具此美意所以

大英特派包玲公使大臣一員

暹羅簡派王第功穆變翁沙提轄插勒等五員爲公堂大臣各將恭奉上諭及

敕賜權衡便宜行事令旨互交驗閱均皆妥善協適

茲將應行諸事款詳開條列於左

一自今以後

大英君主 及後代嗣主
暹羅君主

二王及後代嗣王永遠和睦和好凡有英民赴暹羅國土必爲國憲周全調護俾其寓居暹羅境內無虞危險一切貿易交易如意順適並不致受^受暹羅民庶欺侮損害如遇暹羅民人前到英境上或各屬地亦爲國憲一律庇護

一凡有關涉寓處暹羅之英民事務情節者皆歸委派駐劄暹羅棚郭都領事官管理該領事官宜將本約各條並前於丙戌年英國守備已爾尼所議建定條約內有未刪改各款一切親履遵行並率英民循踏無越凡有自今或日後定設約束寓居暹羅之英民及治理通商事款暨禁止不便暹羅法度之新章該領事官亦應一體照行凡有暹羅英民相持爭論由該領事官並暹羅該管官會同審斷罪在英民則領事官以英例罰治罪在暹羅民則暹羅官以國例懲

處惟有專事爲暹羅所係者英領事官不得越俎與聞有事專爲英民所關者暹羅官員亦無得出位干預且議定該領事官必俟兩國各將本約

御筆批准並必待

批約之後得有英資主懸掛英旗領取英字牌之貨船十隻進口以圖貿易方准

其赴棚郭履任

一凡有暹羅民人承英屬僱工使令而犯法者或有無論何項暹羅民人已犯法網或有意逃去而致投往英屬家下躲避者由該領事官查明有犯罪或逃避之的據則將其人交與暹羅官憲治理凡有英屬民人或在暹羅寓居或偶到貿易因犯法而逃去在暹羅境內藏隱俟英領事官移咨請行拿交亦即照辨倘偶有華民前赴暹羅未携有確係英屬之據則英領事不能援爲英屬伊自不歸英領事官所庇

一凡有暹羅國各口皆准英人前往通商貿易至於恆常寓居惟准在棚郭都城並在條約內議定界限矣英民抵棚郭居住皆准其賃地買房建屋惟自京城

外以四千桿即英四里之程爲度英民已在暹羅居住十年以上方准其在畿內買地蓋房或由其人專請暹羅國憲特准者亦許之此外凡離棚郭城以內河船艇一晝夜間行程之遠作爲圍地其中准購買房地園林樹木等產英人凡有欲置買者必先請英領事官移咨該管官憲英官與暹羅官會議酌奪定明英人竝無反意勤佐協辦俾得公定議價訂確四至地界蓋印契據交給收執永爲該地業主其人其產皆爲該郡及地方官所庇凡有平常事節該管官憲以例令行該地主自應遵依課稅亦必同暹羅民人一律輸納但該英人自領地以後三年爲期如或懈於與工或力有未逮或緣別故致未興造暹羅國憲仍將該地段取回原價交還

一凡有英民有意在暹羅居住必赴英領事官署將姓名登籍若欲出口或到本約定限居住之界外必先請英領事官轉咨暹羅官憲給照爲憑或意欲離國而國憲移知英領事官指以有不便准其出境緣由暫不准他適惟上一條載明其應得往來之界限向英領事官發給照票內用暹羅國字書明其人姓

名業藝年貌繕備移請暹羅官蓋印畫押註記方聽其人具領任意前行遊玩暹羅國內諸處駐劄官員見有英人到境可向其索取照票驗閱刻勿停阻即放順道前往因無照票者致人慮其或係逃人自應將其留止刻爲移行英領事官知照辦理

一凡有英人在暹羅國居住或偶抵其地皆准任便拜禱

耶蘇至於禮拜堂宇有欲建立者先行擇選地段呈明暹羅該管官俟查勘定奪即准興造凡暹羅民人一切充作英人司事服役百凡差使暹羅國憲俱不禁止如有暹羅人原有東主所營而其人投英屬下服事其原主訪知將其索回亦准其仍返原主其有英人僱倩暹羅人司事工作兩相約許而其人原營東主非經知情允准者迨欲取回由暹羅官憲審訊則所約許作不足爲據

一凡英師船駛入大江准其到北攬關地方掙泊除因船隻損壞請爲修理應駛行前進由暹羅官憲自必專准者外概不能逾越前進駛泊如英師船係載駕

大英派到暹羅之

欽差大臣方任其直抵棚郭惟化拉加茂必伯訥二炮臺前除暹羅官憲特進者餘不准往前駛遇河面偶無英師船駐泊忽生事故英領事官欲將本屬商民抑或貨船水手約束亦可咨移暹羅官即應派遣兵役協同動助辦理

一凡前道光丙戌年間定有條約英船入口應納船鈔若干自今茲約與行後凡船鈔銀概行裁免嗣後英船貨物貿易惟有起艙落載出口進口之課稅而已其入口貨物照價值按三分抽收如係貨物無百件內核抽三件或按時價將貨值統核估計每值百兩抽銀三兩如抽稅後其貨不能銷售仍載出口者暹羅營稅務監督官將原收稅項照數交還貨主至進口時倘有貨物暹羅英商因關吏議價不協應請英領事官咨移暹羅該管官會議彼此均勻邀集英商暹羅商公同估訂該貨價值其鴉片土進口概不納稅至出售時惟包攬經紀頭人或經紀頭人之屬下人方准經手承買餘人不得交易購買倘英商與攬頭人等議價不協不肯出售或將鴉片土仍帶出口一切俱無鈔稅使費惟別行售買于犯本制者將鴉片土概行全抄入官

其出口各貨自出產製造成時至登載上船出口惟納稅一次不論落地稅海關稅一物不重徵第二次稅銀凡暹羅土產各物無論由陸路下船及裝運出口其稅項皆在附後稅冊內登記明哲又已會議詳妥各貨凡在內地已經納稅者出口時不復重稅英商購買貨物准向該貨產造之原主直行議定交易暹羅人買貨亦准逕向英商訂買兩俱無庸旁人從中居間插手本約附後稅冊銀數俱照中國安南國船載貨到暹羅之例凡中國安南船到暹羅嗣後有何獲受惠益之處英船亦一體同得英商需裝造新船應請暹羅該管官准行方得與工裝造鹽米魚三種如內地所產恐或不敷應由暹羅官憲出示禁止不准運載出口凡金銀製造器皿出入口者概不徵稅

一凡有後開通商章程該領事官與暹羅官憲認真率令遵行如查各章程尙有未盡未周英與暹羅兩國官員會同商議約爲加增條款俾倍悉遵約凡有犯本約條例所罰銀兩俱歸暹羅國收理英領事官未到棚郭履任之先凡有各貨船管商准其赴暹羅官憲署面請會議諸務以期詳協

一凡嗣後暹羅國另有允許他國人民及許他國惠益之處亦准英人同得有增加推廣者亦准英人增廣

一自將本約呈請兩國

君主御筆批押定奪以後十年爲期滿時有英國或暹羅國需爲重加訂改者先一年預爲聲明俾兩國各

簡派大臣會同商議據其識略意見將本條約並丙戌年定約內有未改訂之條及稅冊章程又或有後來增入改訂者即爲酌奪妥辦

一凡本約各款應繕寫英文暹羅文各一帙文理意義皆同兩國御筆批押彼此先爲分交收執於

耶蘇降生一千八百五十六年四月初六日即暹羅一千二百一十八年五月初一日是日爲始自後即照約施行所有前出名之兩國

欽差大臣已將本約條例於降生一千八百五十五年四月十八日即暹羅一千二百一十七年六月初二日繕備四紙各加書押簽記以爲握據

通商章程

一凡有英貨船到棚郭貿易該船駛至淺脚寄碇或前或後著使地人前赴北境關上報進口單開本船水手若干名炮若干位及由何地駛行到此呈載詳實並將船內所有炮位鐵彈火藥呈交關吏收貯由關派委員一名到船一同前進駛入棚郭都城

一凡有英貨船不遵上列條例行抵攬竟未呈交砲位彈藥逕行駛進當即令其返抵北灣照例舉行仍罰銀八百銖再令其將砲位彈藥一概交出然後開行進詣棚郭都城

一凡英船抵棚郭灣泊除禮拜日不計外著該船主限二十四點鐘內赴英領事官署將船牌貨單呈交明哲聽候移咨海關監督刻爲發牌開艙然後起貨倘有隱報虛報等弊違犯本例者罰銀四百銖如該船呈報後限二十四點鐘之久許其自查有漏報錯誤之處即准再赴領事官署檢舉呈明請改

一凡有英船進口以後尙未請報管酌奪遵行而擅自開艙者或走私瞞報脫漏

課稅者均罰銀八百銖仍將私漏之貨物盡數查抄入官

一凡有英船入口之後將貨物全行起卸至回帆時將出口貨物裝載完畢交納稅餉清訖將紅單赴領事官署呈明領事官查驗移知管關官復核其並無不准出口事故由關給與照單另派委屬官一員同赴北甌將前交貯之砲位彈藥仍行付還准其揚帆出口

一凡遇

大英欽差大臣有不諳暹羅言語文字者茲兩國議定條約稅則章程以英文為準

文理意義實解皆在英文內閱之可得其確據

計開出口貨物凡在國內各落地稅關稅俱不征納惟有出口各稅款開列於

左

象牙每百斤擔餉一末
牛皮、、、一末
海參、、、三末

鼈甲每擔餉銀一末
藤黃、、、六末
象骨、、、一末

犀角每擔餉、五十末蓋銀ヲ脱スルナラン

魚肚、、、三末

虎骨、、、五末

白豆蔻、拾四末

毛燕每百斤抽二十斤百六十斤

牛角、、、一末

沙仁、、、六末

烏皮、、、六末

象皮、、、一末

采鸞干、、、一末

兒茶即楓子、、、二錢二匁

虎皮、、、一末

箭翎、、、二末二錢

馬錢、、、二錢

山甲、、、四末

玉只、、、一末

浮大海、、、二錢

紫梗、、、一末一錢

降真、、、二錢

甘文煙、、、四末

芋仔、、、一末二錢

白魚翅、、、六末

白樹皮、、、二錢

戾魚干、、、一末二錢

烏魚翅、、、三末

香柴、、、二末

| | | | | | | | | | |
|------------|---|---|---|------|------------|---|---|---|-------|
| 三班干、 | 、 | 、 | 、 | 一末 | 甘密、 | 、 | 、 | 、 | 二錢 |
| 魴魚皮、 | 、 | 、 | 、 | 三末 | 蘇木、 | 、 | 、 | 、 | 二末一錢 |
| 孔雀屏每屏餉銀十束 | 末 | 末 | 末 | 末 | 鹿肉、 | 、 | 、 | 、 | 二錢 |
| 色角、 | 、 | 、 | 、 | 一錢 | 牛骨、 | 、 | 、 | 、 | 三分七毫五 |
| 鹿茸價銀百末餉銀拾末 | | | | | 犀皮、 | 、 | 、 | 、 | 二錢 |
| 烤皮、 | 、 | 、 | 、 | 一錢 | 紅柴、 | 、 | 、 | 、 | 二錢 |
| 鹿仔皮每百張餉銀八末 | | | | | 西仔皮每百張餉銀三末 | | | | |
| 臭皮、 | 、 | 、 | 、 | 一錢 | 龜底、 | 、 | 、 | 、 | 一末 |
| 烏木、 | 、 | 、 | 、 | 一末一錢 | 米每車餉銀四末 | | | | |
| 鹿筋、 | 、 | 、 | 、 | 四末 | | | | | |

二議明後、開各貨物、照本約條例、納餉、其在內地、亦照例征收、至裝載出口時、無庸重納稅餉、

白糖每擔餉銀二錢

各色豆每十二份抽餉一份

| | |
|-------------|--------------------------------|
| 蜂蠟每十五份抽餉一份 | 赤糖每擔餉銀一錢 |
| 蝦米每拾二分抽餉一分 | 梓油每擔餉銀一末 |
| 棉花每十擔抽餉一擔 | 油麻每十二分抽餉一分 |
| 鹽每車餉銀六末 | 胡椒每擔餉銀一末 |
| 荖仔絲每十二分抽餉一分 | 荳芬 <small>即生煙</small> 每于束抽餉銀二錢 |
| 甘望魚脯每萬餉銀一末 | |

三議定凡各貨物、有未經此冊登藉註記者、所有應納內地稅餉、俱照現行例、征納、不得加增、已納此稅者、方准其出口、無庸重征稅餉、

鈴木大雜集四

四百四十

鈴木大雜集

五

乙集

雜集

文久辛酉一
鈴木大

共五册五

一昨二日英國ミニストルアーロコックが書簡差出申候其趣之大意を挽ひき
左ニ申上候

一去廿八日夜ニ午前不圖賊我使臣館ニ亂入し私共も一同右災難ニ逢るゝ
望しを天幸ふよ望て生命を全ふせる事を得たり其形勢ハ外國奉行方御
來臨望て見給ひぬをバ直ニ 台下ニ被申上たるへけをバ今改めて爰ニ
記さば其概略を申さんニ賊兵三手ニ分を三方方亂入し寺僧をおひや
ゝし我寢室を尋たせとも敢る告さすけをハ諸品を探りてモリソソヲリ
ハンと兩人之居室ニ至り疵付て遂ニ我隣室迄來りたせとも其内ふ目を
覺し起出たるを以て遂ニ來りたりしふ廊下狭く鳴居ニ妨をせて刀の用
法便なき依之刀難を免るをたす此時警衛之人達漸來望て賊兵を切拂
ひ遂ニ討取給ひて大ニ戦功を顯し救ひ給ひけり去冬私共横濱引取之刻
大君井太政官の御名を以て

大君の親兵を以て警衛しぬをハ最早殺害愁るへくもあえしとて歸る

しめぬをしふ未四ヶ月ふ満たは果して此度之大難を^レか^レの賊兵等の形勢を見るふ貴人ふ^レあ^レたし大名之臣下あるへし 台下達常ふ説給ふ浪人無法者^レと兎角使臣館之異人ふ災せりと右浪人坏人を殺し又自分死し身命を抛つ程之事を何之功^レも爲^レるき道理かし是^レ其主人より被申付歟又^レ人ふ被頼歟^レも^レあるべく就中是^レ水戸之人あるべし其所爲惡むべく嫌ふべし生取之者を糺明あ^レて萬事異國之名代^レも打明給ひ政務を行ひ所置し玉へ^レあ^レし私共も女王の名代とな^レて來て旗^レ疵を被付たれ^レ此事を國本へ申送^レて理非を正して後尙事情を秘し給ふ事^レある^レ一戰ふも可及候彼賊兵之所爲全ク兵戰を挑む之形あり

六月四日

西六月二日 亞墨利加公使^レ返翰

亞墨利加合衆國公使全權ミニスルエキセルレンシートウンセントハ
ルリス^レ

貴國七月八日附第七十號之書翰落手セリ去月廿八日英國使館へ亂入せし兇徒之義^レ付色々被申越右者此方^レも尤氣之毒^レ及ぶ所^レにして將來之所置等彼此心配せし折柄其許^レも而會相談及度所^レあるハ來書之旨^レふ從ひ速^レニ面晤いたし度來ル四日我九ツ時前^一西洋第一時對馬守邸宅へ被相越候様いたし度候猶其節萬縷可申談候拜具謹言

文久元西六月二日

久世大和守花押

安藤對馬守花押

同六月五日英吉利公使へ返翰

貌利太尼亞格外公使全權ミニストルルーセルフヲールトアールコツ
ク^レ

貴國第七月七日附第五十貳號之書翰落手披見貴國本月五日之夜數多之兇徒其使臣館へ忍入亂妨及ひし義^レ付件々被申越且即夜警衛諸士并番兵之者等死傷等之危難^レ及ぶまで奮勇苦戰せしといへとも其許始メ附

屬之士官等危難其生命_ニ及_ハさりし_ヲ全ク天幸_ニして初發兇徒之館内
へ忍入し頃ハ護衛之者等曾て覺知せざる由議論之趣無謂_トと思_ハさ
とも我等_ニ於て曾て其邊之懸念も少_クある_ヲより最早新_ニ護衛之者
を命せし_ハ其境内而已なら_ハ館内へも相詰爲置度旨申入るといへとも
其許肯て承引_カけ_テハ暫く其意_ニ任せし_ハ途_ニ今段之_{般カ}危急_ニ及_ヘり尤
從來護衛之者等へ不慮_テ成功_ニ任意_ニせ_テへ_キ段_ヲ我_等常々嚴重_ニ命し置
るとかき_バ以後護衛之士を館内へ差置事_ニ領諾有_之度神奈川_ノ貴國軍
艦を被呼寄其兵卒を以我護衛之者へ加_ヘみ_ヲ有助_トかき_ヲし_段心入
之事_ヲも問近く刀鎗を以て刺撃_スる_ニさ_ヘ互_ニ熟知_セざる_時ハ過誤
なし_トい_ハひ_ハた_キハ砲銃の遠き_ハ利_ヲあり_テ且其力強大なる_ハみ_トき
ハ一旦事_ヲ臨_ルの際_ニ臨み言語通_セざる_所貴國之兵卒等兇徒_ト衛士_ト
を識別_スる_事不能自然如何様之過誤_ハ及_ハん_も難計_ヲ却_ル是_レ爲_ス防禦
の手筈_ヲ失_フ至_ルん_歟懸念_之筋_ニ不少_ニハ右兵卒_ハ差戻_ス候様_イ

たし度且今度亂入せし者ハ只一己之念慮_ニ出_テ竊_ハ是_レを主使_スる_者有
る_ニる_旨申越_スる_を兼_テも申入_セし_如く身柄_之者_ハふ_テも開港初頃迄
ハ外國_ト條約取結_ハし_を甘ん_セざる_族有_リし_趣も聞_ヘし_追々政府_ノ
處置_ニより_テ今_ハ絶_テ有_ルとなし唯下賤_之輩鎖國_之爲_ハ拘執_シ頑固_之
情_ハ一己之偏見_ヲ主張_シ身_ヲも命_ヲも不顧_スもの_トもの所爲_ハ起_ル所_ナ
れ_ハ年月_ノ久敷_ヲ待_タさ_ハ其氣質_ヲ變化_セし_むる_事か_タき_ハ此_上談判_ノ
之節申聞置_シ事_ニて既_ニ了解_スる_所を_ハし_かる_べし_就る_者猶巨細申入_度事
件_もあり_ト雖_も譯文_等之_手數速_ハ行届_カたく_返翰_ヲ差急_ル趣_カを
ハ先_ツ概略_ヲ演述_シて答_及ぬ_件々_之事情_ヲ猶跡_ハ可_申入_候得_共書中_ハ
て_ハ其事_ヲ盡_シ難_ニ付_不日面晤_ニて萬事詳悉_セんと_欲き_此段答書_旁申
入_候拜具謹言

文久元年六月五日

久世大和守花押

安藤對馬守花押

同六月六日英吉利公使へ書翰

貌利太尼亞格外公使全權ミニストル、ルーセルトアールコックの

以書翰申入候去月廿八日夜無頼惡徒十四輩亂入せし時不行届之儀も有之趣被申越氣之毒之至り候乍去其使臣館護衛之爲附置る、大君之親兵を始警衛諸家之藩士何をも力を戮せ防禦接戦及び親兵之内六人藩士之内三人者痛手を負既ニ其親兵之内ニ翌日死ニ及へる者有之程之義其他淺手を負へる者數輩ニ至右等ハ其許ニ目撃せし事ありハ今別ニ詳審するに不及と雖畢竟其許等之爲ニ斯迄力を盡せし故亂入せし者之内三人ハ其場ニ殺傷し一人ハ疵爲負捕押へる事を得たり猶其殘黨之内三人品川驛旅店へ取隠候得共手配相届候故難逃候哉ニて自及及び二人ハ即死せしりとも一人ハ未タ死ニ至らざる間捕押し者共一同一ト通相糺せし處何とも常州邊之浪人之由ニて別紙拾四人連名之書付を懐ふし互ニ堅く黨を結ひし趣ハ相聞即時嚴敷鞫問を遂げ度ありとも疵所

療養ニ障り萬一死失せる時ハ吟味之手段を失ふの恐を感せハ即今厚く治療を施し平癒を待て嚴敷相糺し事情明了を得者賊巢搜索之術ハ十分施易あるべし尤も逃遁之殘黨者即今百方手を盡し其筋々へ命を下し專ニ手配をさせしおをハ兇徒捕獲之報告を日夜待ツ所也勿論去春我元老出仕之途中ニ待受亂妨及びし惡徒等逃竄人數并姓名等迄巨細相分居穿鑿方を盡すと雖も更ニ其便を得る當春ニ至終ニ其一人を捕獲せし而已なまハ今般之賊徒も今より豫し兇捕へ盡へきと之事ハ必とし難けをとも前も申演る如く追捕之手筈を盡しぬをハ定て其效空ある間敷と思ひぬ先きお返書を以て申入し趣も感せとも猶此顛末を繼述して護衛之士面々用意等閑おえ且常々我政府の注意淺かおさる段諒察を乞ふ尤過日外國奉行俱々宿寺内締りのヶ所々々一件商議之趣も有之奉行も件々引合及び粗整頓ニも至る哉之由おをも右者一時之取計ニ付猶後來之警衛筋先奉行も追々其許を見込をも相尋夫々所置及ぶるけを

とも此程も申入し如く館内へ護衛之士不差置候てハ十分之警衛ハ行届間敷ニ付以來ハ館内之護衛之者差置候儀領掌有之度其他猶面晤不盡さんと欲せむハ來ル八日九日之内九ツ半時過^{西洋一時}對馬守邸宅へ參るゝ様いたし度依之別紙書付相添此段申入候拜具謹言

文久元酉年六月六日

久世大和守花押

安藤對馬守花押

別紙者東禪寺亂入之輩存意書并右人數書等添重複ニ付略之

シーボルト方書翰差出申候其趣ハ此度之東禪寺一件ニ付御大名様方へも御觸渡有之可然段申出候右御觸案文差出申候其文意ハ通信交易之條約取結候上ハ其國々方帝王之名代として互ニ尊敬いたし若し是ニ敵對仕候得者則其國之帝王ハ敵對仕候と同様之義ニ付嚴刑ニ被行候趣ハ元來交易ハ有無を通し候事ニて日本國ニ者大ニ利益ニ相成候其故ハ每歲生し候物を出し金銀を日本國ニ取込候故也大名之臣下右使節ニ對し

狼藉仕候臣下之國へ兵を起し打懸可申候其節ハ公邊カも御差留ニ相成不申候左候得者獨立同様ニ相成忽ち亡ビ可申候是等之趣御觸渡有之可然段申出候

此度東禪寺へ浪人共夜討仕懸候義ニ付英國ミニストル方長文書簡貳通和蘭コンシユールゼテラール井ホンシーホルト等方も書簡差出申候亞國ミニストル方閣老方御逢之義願出候
英國方差出候書簡主意を左ニ申上候

我英國女王使臣館ニ者英國女王之國旗有之私儀女王之名代ニ御坐候右館内へ夜討を仕懸候既ニ私も賊兵ニ被討取可申處幸ニ暗夜ニて賊兵共勝手不案内ニ付漸相通候時ニ至り御用出役之兵救來候得共私活命ハ僥倖ニ御坐候國旗有之候女王名代之館内へ夜討仕懸候得者即英國女王へ敵對仕候同様ニ御坐候右賊兵之根本御正被下嚴刑ニ御行有

之候歟右賊兵御捕御渡有之歟兩様之内ニ無之否ハ英國之旗ふ疵を被付候間此段英國へ申送り大軍を以此恥辱を雪き可申候元來賊兵を浪人無宿者抔と御申聞御坐候得共彼等も日本人ニ相違無之候得者我方が見候節ハ日本を即敵國ニ付御答次第合戦之上彼等を始悉く討取可申覺悟ニ御坐候急速御答承度段申出候又賊兵誓詞書并囚人白上之口上御送有之様申出候日本カハ陸之警衛計ニテ水軍之備無之ニ付横濱ニ來居候軍艦呼寄海上之防禦井宿寺警衛をも申付置候和蘭カ指出候文意も大半同様ニ御坐候得共少々相違有之申候元來日本ハ世界萬國之所置と相違他人を殺し己も死し候ても是を刑し是を探索等之義無之且萬事秘し候事のみと相見申候私義も國元へ引取國王へ此段申出候上此度之所置相濟候由申聞候迄も再び日本へ參り不申と之趣申出候

六月六日

八月廿一日阿蘭陀コンシユルへ返翰

阿蘭陀コンシユルセテラールエチセルレンシーイカテウキットは

貴國第八月廿九日附第貳百四拾五號之返書落手披見^{ブネツカ}丁抹と條約取結之趣及斷候ニ付再應申越さ^{トカ}し議論之趣其意を了せり然處毎々も申入し如く近年西洋諸州と條約取結し以來品々人心不折合ヲ生し既ニ各國條載せる所の兩港兩都開市延期之義をも各政府へ申入をし程之事か^{トカ}ハ此上他之國々之條約取結か^{トカ}も眼前何様之患害^{トカ}引起^{トカ}るき哉も難計^{トカ}をハ方今他之國々と新ニ條約取結さ^{トカ}る段西洋諸政府へ觸達し置度旨前年貴國のコンサートスを以て其政府へ申入をし而已か^{トカ}ハ近年同様之主意を以亞國公使エキセルレンシーハルリスにも猶諸政府へ觸達し方申入し程か^{トカ}ハ今更丁抹と條約取結置か^{トカ}も第一右之諸政府へ對し不都合而已か^{トカ}ハ今後他之國々カ條約取結の爲メ使節等指越せし節斷り方ニ於て辭かく且ツ我政府自ら^{言カ}其意を食むの理か^{トカ}ハ申越さ^{トカ}し

議論之趣其許ニ取テハ謂モカニ事カニねト我方ニ於ても不得止のい
 之何レハ此上西洋各國ト條約取結ヒ之義ハ斷リ及ヘるニテ其許國元カ
 全權之書札を到來セニモ頃ハ右各政府へ調達^{調カ}之義未タ行届^カルニ
 との趣カニモ方今ハ定めシ夫々行届シ事あるベシカニハ丁抹於ても
 既ニ我政府の主意を領セシカニハ我等カ再應申入^カニハ斷リ之趣
 を以テ尙其許カ同國政府へ委細申通シカニハ様イタシ度此後右様之義
 ニ付如何様論辯有之とも迎モ其意ニ同シカニハ無益ニ文筆を勞セ
 ズニ事カニ望尤今より幾回の星霜を経シ後の模様等ハ預シメ申入
 ル^カニ此段再答如斯候拜具謹言

文久元酉年八月廿一日

久世 大和 守花押

安藤 對馬 守花押

七月廿五日英吉利公使へ書翰

貌利太尼亞格外公使全權ミニストルエキセルレンシールセルフ
 フォールアルコックに

貴國八月附第六十一號之書翰落手別紙姓名簿載る、所之者へ一謝を述
 ズニ爲メ其公使館へ招る、趣懇親之情委細領承せり然る、傷創未
 タ平癒ニ至スル迄の、物も亦全快次第一同招キハ應セズニ且禮
 謝を表セズニ爲メ贈り物いたサズニとの義者過日神奈川表ニ於テ
 酒井右京亮カ委細申入^カニハ趣ハ心得ズニ強テ配慮カニカニ様イタシ度
 候尤此方ニ於テ戰鬪之功委細取調及フニ處其夜格別之働キカニカニ
 返書旁申入置候拜具謹言

文久元酉年

久世 大和 守花押

安藤 對馬 守花押

七月廿五日

別紙

鈴木大雜集五

御目見以上

小十人雄五郎兼子

天野岩次郎

御目見以上

小普請於菟次郎總領

今井善十郎

同

澤井楨之介

同

新御番瑛之介總領

河野寅吉

同以下

小普請亥之介粹

中尾祐太郎

同以上

深津彌太郎

右外國御用出役

石川治介

上原瀧之介

御目見以下

大御番同心庄左衛門粹

江幡吉平

同上

御書院番源吉郎弟

柘植鉄吉

御小性組虎之介伯父

安藤銳次郎

同

小普請勘五郎弟

北條薰三郎

同以上

大貫増吉

同

川邊助十郎

谷津鉦之介

右松平時之介家來
右人名之順序者働之甲乙にて錄之身分階級ニ非之時之介家來も同様之事

英吉利人方差出候名前書

死

江幡吉平

輕創

大貫増吉

天野岩次郎

今井善次郎

松平久米次郎

右親兵

重創

中尾祐太郎

輕創

河野寅吉

柘植鉄吉

本庄幸之介

小村富治

中村伊三郎

野村寅藏

八十島惣介

山口民之介

横地豊三郎

輕創 上原瀧之介

同上 與吉豐太郎

重劍^{引分} 阿部助十郎

右松平時之介家臣

中山 主水

深津 勇太郎

木多 幸吉郎

阿部 勝之介

青山 角之介

能勢 銀次郎

安藤 鉞太郎

筒井 勘助

右八人者創者至^ゑさを共大戰^ニたり

英吉利公使へ返書

貌利太泥亞格外公使全權ミニストル エキセルレンシー ルーセル
フアール アールコックは

貴國八月廿六日附第六十六號之書翰并繪圖面共落手ミニストル館地所

之義ニ付申越さるゝ趣逐一承知せり右先般中々兩度迄も其許外國奉
行同道ニて實地見分談判被致候趣も有りて彌右地所ニて異存無之趣ニ
付委細 大君殿下へも言上せし所速ニ許容有之候間別紙圖面朱引之全
地中へ我條約濟國々之使臣館可取建積亦ハ其心得を以て地坪ヨリ方
之義ハ各國見込廣狹次第各ミニストル等へ打合せ不都合無之様應接可
被申越候將同所借地代之義ハ百坪ニ付一ヶ月金壹兩宛ニ一定せんと
且普請之義ハ兼て申聞ゑるゝ通り此方ハ取補理貸渡之積取計可申普請
出來之上ハ總入費十分一之割合を以賃借料として年々差出さるゝ様い
たし度候就^ルハ右普請其外諸事取扱方勘定奉行松平出雲守外國奉行水
野筑後守鳥居越前守目付松平備後守ハ委任いたさ^し間右等引合筋ハ
同人等へ無伏臆被申談候様存候依之別紙圖面へ坪數間數相加へ此段答
書旁申入候拜具謹言

久世 大和守花押

文久酉年八月十二日

安藤對馬守花押

亞墨利加合衆國全權ミニストル エキセルレンシー トウンセント
ハルリスは

以書翰申入候別紙繪圖面朱引之地所ヲ條約濟各國使臣館建造之地と取
極申度右ニて遠存者無之哉且貴國ミニストル館取立を度場所其許見
込如何可有之哉各國之中廣狹異同も可有之ニ付外國職等も被打合不都
合無之様坪數取極可被申越且右最寄海面へ波戶場一ヶ所取建小船出入
を便し其外館外之周圍へハ塀牆等取設け候積り將同所土地代之儀ハ
百坪ニ付一ヶ月金壹兩宛之積ニて右總體普請等之義英公使ニ者此方ニ
テ取捕理有之度旨申聞け候間其通取計右普請出來之上ハ總入費十分一
之割合を以賃借料として年々差出し候様打合置候得共貴國ニてハ如何
被致候哉承り度若當方ニて取建候義ニも候ハ、圖面早々被差越候様致

度尤右普請其外諸事取扱方勘定奉行松平出雲守外國奉行水野筑後守鳥
居越前守目付松平備後守へ委任いたさ候間前書引合筋ハ同人等へ無
伏臆被申談候様存候依之別紙繪圖面相添此段及打合候拜具謹言

文久元酉年八月十二日

久世 花押

安藤 花押

阿蘭陀コンシニルセチラールエキセルレンシーイカテウサットは
同文言

佛蘭西全權ミニストルエキセルレンシートセンテヘレクルは
同文言

本文朱引之所ハ阿蘭陀佛蘭西へハ除之

於兵庫外國奉行竹本圖書頭英國ミニストルアールコック英國領事官
兩人と應接之大意

竹本

其許モス一件ニ付支那へ被參候用向相濟候哉遠方之處大義之事ニ候
アールコック

右モス一件分明ニ相分無滯相濟申候

扱此度拙者を態々當地へ被遣候者其許兵庫一見爲談判并海路被歸
候様相談可致旨被仰渡罷越申候

前日長崎を以書簡申上候通陸地を歸府仕候様決心仕候

左も可有之候得共人氣騒敷時節ニ付日本政府ニて者甚心痛有之且拙
者江戸表出立前浪人共多人數ヒストルを求め京攝へ赴候様風評有之
候 大君殿下も大ニ被遊御心配急ニ拙者を被遣右之事情能々被致
推察當地を船ニて可被致歸府候

元々私職分ニ於て陸行可仕之道理候間陸行相願申候最早右之心積
ニ仕居候間是非東海道を歸府可仕候

以下各條竹本
又ハア
ツグト認
ムベコ

右様被申候を差止候も斯親睦之上不慮之義出來候てハ却る事を破可
申候前日も浪人體之者兩人堺奉行手ニて召捕申候之間甚致懸念候

夫も如何あるをのニ候哉私共を付ねえひ候哉

何も付ねらひ候證據も無之候得共右士之義を政府ニて甚心配仕候

右様之者御取鎮無之も日本政府權威なき故也速ニ御取鎮可被下候
私も萬一不慮之義有之候ても私一身之事ニ付是非東海道を歸府仕
候

其許被申候も一理無之にも相聞不申候得共兩三年前迄鎖國ニ候得者
未タ鎖國之餘風貳分通殘居申候然らハ大坂を奈良に出伊賀越を東海
道を経て歸府可被致候先其趣者取計見可申候

京都に者通行出來申間敷哉

京都者此節 姫君様御下向ニ付神社佛閣杯へ爲御名殘御參詣ニて萬
事不都合おせハ此度ニ可被見合候

左候得者乍殘念此度ハ見合可申候

右様應接相濟申候只京都を御差留之 思召ニ御坐候得共最初方京都を
申出候てハ彼等迎も承諾不仕候間右様御説解之様子ニ相見申候

五月廿二日

右アールコック儀明日歸府仕候様子ニ御坐候

對州表魯西亞船之義承り候處始魯船參候哉否對州人棒を以打候より起
候事ニ對州之方却る暴ある様子ニ御坐候元來對州ハ日本人參り候て
も上陸爲致不申趣ニ承り申候魯人之主意ハ英佛より不遠内對州近地へ
兵を出し可申ニ付先魯國ハ測量等いたし置對州邊へ兩三艘宛舟を出し
兩國ニ彼地を不被奪様仕度積ニ候様子御坐候對州侯夷人へ御逢之義家
來共折合不申相止候様申事ニ御坐候右船ハ不遠江戸へ參り可申様子ニ
相見候様承り申候軍艦、艘品川沖へ入津仕候英國軍艦ニ對東禪寺へ止

宿仕候ミニストル爲警衛參り候様申事ニ御坐候右船將同道ニ對御老中
へ御逢願出申候

近年海外不穩時勢ニ付異人共萬一近國致亂妨等之節頼談之向も有之候
節任其意可盡信義ハ勿論ニ御坐候得共自然右體之趣ニより候てハ兼而
之規則第一長崎表御警衛嚴重手當之外猶又急速人數船等指配且領海手
廣大洋を引受居候事ニ付私ハ御國體ニ拘り候次第ニ付夫々海軍手
當向嚴重手配不仕候てハ不相濟候儀ニ付乍心外近領ハ、心得ニ御坐
候尤判談筋迄ハ迎も難行届及斷候心得ニ御坐候尤時宜ニより餘り有之
節ハ取計方可有御坐候得共相心得第一長崎表手當之筋并領海手配等之
義猶又重疊ニ入候様國中末々迄相違置候心得ニ御坐候得共右等之趣無
屹度御内慮を以奉伺置候様國許方申越候以上

五月廿四日

松平美濃守内

大野 小辨 治

右久世殿へ指出候事

五月廿一日

小笠原信濃守届書

口上之覺

- 先月廿八日異國船壹艘西海へ領海蘇島沖へ通船長州六連島へ繫船仕候
- 一同廿九日右蒸氣船一艘長州赤間關へ乗行無間も乗戻殘一艘を引一同赤間關沖繫船仕候
- 一同日異國船蒸氣船一艘西海へ領海通船是又赤間關沖繫船仕候
- 一去ル朔日朝右異船を異人八人ハツテイラメ乗組私領分門司浦へ乘來致測量乘歸候處無間も赤間關へ異船貳艘乘來同浦へ繫船仕候
- 一同四日右異國船四艘之内三艘上筋へ向出帆内壹艘者即夕乘戻同浦へ繫船仕候

一同五日内一艘出帆長州福浦前繫船其後領海大橋川口洲先碇泊仕都合貳艘繫船仕候

一同日夕蒸氣船壹艘上筋へ出帆喜多久村沖へ繫船翌六日上筋へ向乗行申候

一同六日夕異國蒸氣船貳艘上筋へ領海下筋へ向乘來同一艘下筋へ渡來何を領海門司浦へ繫船仕都合四艘碇泊仕候
右之通り繫船仕候ニ付其都度々々手當人數穩便ニ用意仕浦々入念候様申付物見船差出爲聞糺候尤相糺候之趣別紙之通御坐候未退帆不仕候得共不取敢家來之者申越候ニ付先此段申上候以上

五月廿一日

小笠原信濃守

別紙

別紙御届申上候通り去朔日私領海へ異國船碇泊仕候ニ付役人共差遣和語蘭語等を以一通通辯仕候得共不相通候中清人體と見掛候ニ付國

名來意其外共追々聞糺候處何をも嘆咭喇國軍船にて唐國上海へ長崎港へ渡來暫同所へ滯船對州に立寄同國出帆長州六連島へ乘渡夫が領海へ碇泊いたし候段渠所持之私國繪圖を以粗通辯いたし長崎が日數凡二日を經來著見物之爲にて又々長崎へ乘戻候由船號者エツヲイラン船將之名ウヲト乗組人數凡貳百人程有之候由粗聞取猶又外異船ふ乗寄聞糺候處唐人多人數立出筆紙乞候體ニ付役人共所持之品貸遣候處渠が漢文を以地名相尋候ニ付豊前國門司關と申聞候處米菜魚鳥牛有之候ハ、持參候様買請申度段申聞候本船退帆之日限相尋候處片手を開キ是と相示候間五日歟と相尋候處合點之様子御坐候間三日異人四人ハツテイラふ乘來門司浦梶ヶ鼻と申處鹽濱脇が陸楠原と申村内所々致歩行候中幼少之百姓共娘兩人へ通用壹分銀壹ツ宛遣候ニ付斷候得共強て差遣候間役人共取上置申候猶又役人共外異船に差遣段々爲聞糺候處赤間關沖沙早く候ニ付門司浦ニ致繫船今日蒸氣船上筋へ出帆之義者赤間關御開港江戸

表に書翰持參之由就るハ右願相分候迄滯船罷在候得者繫船之日數預取極難申聞由異人上陸之趣意相尋候處山ふ登此邊地圖取立候由梶ヶ鼻本船が見付之石ニ白キ粉を塗候ニ付是又相尋候處船々之目印ニ致候由猶外異船にも乗寄候處是又清人體之者相見コンクンと申候て筆紙を乞候體ニ付貸遣候處漢文ふて廣東人之由姓名を尋候處姓ハ容名者亞恩と申役人共姓名をも問候ニ付姓名申聞候異人共にも追々立出候ニ付相尋候處船將之由申候兎角邊鄙にて需候品々難整旨申諭候處米買請度由同四日漁船ニ生鰯少々有之候乞請度體にて手眞似いたし候ニ付差遣候處フラスコニッ船中へ投込候間差返候得共又候投込其儘乘行候ニ付持歸是又役人共取上置申候同日夕異人六人ハツテイラて領内田野浦と申所へ乘來内壹人上陸町屋歩行町人共幼少之娘兩人へ通用銀壹歩井キヤマシ様之德利壹ツ宛遣候ニ付相斷候得共打捨置右船へ引取候付右壹分銀德利共是又役人共取上置申候同日朝異人壹人ハツテイラて領内田

野浦へ上陸同様百姓共宅へ罷越水を乞候體ニ付遣候處キヤマン様之小德利壹差置候ニ付差返候得共請取不申其儘同所へ出船仕候ニ付右小德利是又役人共取上置申候去ル朔日へ同七日迄色々ハツテイラ乗組領内大里御用地場所其外所々へ上陸いたし候ニ付番所有之候場所者番人共へ相制候得共聞入不申押て上陸仕其最寄へも地圖取立或領海所々測量仕又者本船見付石ニ白キ粉を塗申候右之通ニ御坐候ニ付差置候銀井德利フラスコ等取計ひ方之義者在所家來共へ長崎表へ相伺置候間御差圖之趣者追ふ可申上候此段申上候以上

五月廿一日

小笠原信濃守

小笠原信濃守届書

最前御届申上候通り私領門司浦へ英吉利船四艘之内蒸氣船三艘去ルル一日下筋へ向出帆仕候殘壹艘翌十二日出帆長州赤間關へ繫船仕候去ル

十一日出帆之蒸氣船三艘同十三日追々乗戻し右同所へ繫船仕翌十四日右四艘共又々乗戻し門司浦へ繫船仕候
右之通り繫船仕候ニ付兼ふ手當之人數穩便ニ用意相増浦々入念候様申付候尤右碇泊中之次第別紙之通ニ御坐候未退帆不仕候得共不取敢家來者申越候間此段申上候以上

五月廿一日

小笠原信濃守

別紙

別紙御届申上候通り長州赤間關碇泊之於異船大炮二拾發程空發仕候尤祝砲可致放發旨渠へ申立候段前以毛利左京亮家來共へ在所へ通達有之候同十五日異人多人數ハツテイラニ乗組私領楠原村之内雨ヶ久保と申所へ上陸磯邊へ一町程隔候山裾を堀穿無間葬棺と相見箱ニ紅白縫合候油筆様之物を掛右之上ニ劔壹本頭巾様之物一ツ差置持參石穴ニ入暫時讀經仕候體ニて其後異人共多人數立集小銃三發宛相發埋申候右者全ク

死骸埋葬仕候義と相見申候右上ニ小松壹本植付猶又ハツテイラホ乗込
小砲五發相發罷歸申候勿論最初穴を堀候砌役人共々精々相制候得共可
聞入體無御坐候ニ付無餘義差置申候右徘徊或ハ夜中上陸目鏡を以月星
を望申候右徘徊中民家亦者町家等へ立入酒水魚類等乞候ニ付相與候之
處飲食仕通用金銀錢等差置又者處々ニ遊ヒ居候小兒共へも金銀ギヤマ
ン井ニピン或ハ小金具縫針差金等差遣候ニ付右品々役人共取上置申候
尤差向之義ニ付不取敢取計方之義井ニ異人死骸埋葬不苦候哉之段者在
所家來ハ長崎奉行へ相伺候旨申越候此段御届申上候尤長崎奉行ハ御差
圖御坐候ハ、追テ御届可申上候以上

五月廿九日

小笠原信濃守

五島讚岐守届書

去月廿日御届申上候當四月廿四日巳中刻私陣屋元前海領内田尾村と申

所之沖へ碇卸候英吉利船同夕警固之者ハ早々出帆候様手扣機カを以申入候
處明朝出帆之趣申出其後肴請受度旨手様ニて申出候ニ付海老五拾頭鯛
七枚早速相與候處殊之外歎之體ニて厚致禮義其後手様を以上陸仕度段
申出候ニ付嚴敷差留候得共強テ上陸いたし候ニ付警固之者罷出候處別
紙之通り相認差出直ニ乗船本船へ引取候由

一同夜致泊船候ニ付警固之者初番船附置候處翌廿五日卯之上刻出帆仕領
内部崎と申所之海岸筋乘通同様握と申所之沖へ碇卸候ニ付警固始海岸
固人數差出候處ニつていハハ五人丸子村と申所之濱へ上陸夫ハ高山へ
登り山之模様取調候體ニて直ニ下山覆盆子を取居候ニ付警固之者罷出
手様を以早々出帆候様申開候處直ニ出帆いたし候段申出又々肴請受度
旨申出候ニ付早速海老廿頭鯛六枚相與候處歎之體ニて致禮義別紙之通
り書物差出候ニ付果又早々出帆候様申開候處致承知候旨申出直ニ乗船
未刻出帆之處同姓五島近江守領分大寶と申所之前海へ碇卸候模様ニ付

海岸相固罷在候處同夜同所へ致泊船翌廿六日卯上刻同所出帆西方へ向
乗放同申刻頃帆影見隠候段海岸固之人數并福手右遠見番所へ告來候右
ニ付最前差出置候警固人數爲引拂猶又海岸入念候様嚴敷申付候段在所
家來方申越承知仕候此段御届申上候以上

六月朔日

五島讚岐守

英吉利共肴乞請度旨申候ニ付兩度ニ相與候品

一海老 五拾頭

一鯛 七枚

一海老 貳拾頭

一鯛 六枚

右之通ニ御坐候以上

六月朔日

五島讚岐守

英吉利人共陣屋元ニて上陸之節差出候書付寫

送回什物如今食了午食多領謝々々

同握前海ニて肴相與候節差出候書付寫

送回鮮魚數尾多領謝々々

右之通りニ御坐候以上

六月朔日

五島讚岐守

土井能登守家來届書

於北蝦夷地能登守方へ兼る御引渡相成候地内ホロケシ以北ボロコタン
迄大凡四十里之間人煙絶土人住居之地ニ無御坐未漁場等も開拓不仕候
ニ付去夏見廻之者差遣候後見廻不申候處ナヤシカ北之方行程一里餘ニ
て地名シリトツタ非ボト申處ニ魯西亞人渡來家作仕居候風聞有之但ナ
カウシヨロ會所カ北二十里餘之場所早速見届罷越候全相違無御坐人數拾六人内頭目壹名下
官壹名働方體之者拾人婦人貳人小兒貳人居小屋三軒物置壹ヶ所食料仕
出方様之小屋壹ヶ所都合五ヶ所何とも梓組立之造作ニ御坐候此邊一圓
之石炭山ニて觀察仕候處開坑一色之目論見と相見當節開坑四ヶ所堀取

積貯置候分も多御坐候尤去秋末頃方移住之様子ニ御坐候旨彼地ニ差置候家來共方申越候能登守在邑ニ付此段御届申上候

西七月十八日

土井能登守家來

雨森宗次郎

小笠原信濃守差出候書付

私領海へ當五月中英吉利船渡來ニ付右碇泊中追々御届申上候通り所々上陸仕自儘致徘徊其上同月十五日領分楠原府之内雨ヶ久保と申所へ磯邊方壹町程隔候山裾を穿候間家來共方精々相制候得共更ニ聞入不申無餘義指置候處葬棺と相見候箱持參右穴へ入小銃三發宛相發埋申候右者全ク死骸埋葬仕候義と相見申候追々埋葬之場所へ番書認メ候墓印様之厚板を建右廻へ乗^{ホリ}を挿置候故以來英船度々渡來之基ニ可相成と深ク心配仕候其上滯船中間聞之者差遣候砌言語不通候得共長州赤間關開港を願立候存意と相見候右ニ付申上候も指越ヶ間敷奉恐入候得共萬一開港

御差免ニも相成候者は迄一圖ニ御趣意相守異船防禦年來之鍛鍊も空敷相成候儀者領分邊鄙出生之者共一統悲歎仕候勿論赤間關と肝要之御場所九州咽喉と申義ハ人口ニも申傳候義ニて既ニ先祖右近將監忠真寛永年中小倉城拜領之砌重蒙上意且又唐船打拂之義ニ付てハ度々重蒙上意其後唐船漂流之處唐人召捕候ニ付家來共拜領物被仰付候以來ハ別心掛申候一體洋中手當之義ハ數百艘之船共連候事故常々厚世話仕船手方大船改小船改役并梶取共都合三百人御坐候何をも若年方諸廻船等ニ乗組專海上修行相勵格別熟練不相成候半ハ家督相續不申付候且又平常海上事馴得自在候水主共多人數無之候てハ洋中之働キ出來兼自然非常之節兼る重キ上意之御趣意ニ相外を奉恐入候事故海岸廿四浦之者非常之節爲手當古來ハ漁業勝手次第差免置自然海上功者ニ相成候様家來之者へ厚く世話申付置候付漁業渡世之者壹人ニても相増候様仕候仕來ニ御坐候一體參勤之節ハ小倉方大坂迄御暇之節も大坂方小倉迄船

路旅行仕候ニ付多人數水主共入用ニ御坐候處右浦方之者召連候てハ洋中之備手薄ニ罷成候間古來方自用不申付仕來て往返之都度々々水主共他所方雇入自用相立候義ニ御坐候依之重キ上意之御趣意家來之者ハ勿論末々海邊浦方之者ニ至迄能心得從來堅相守申候然所先般英船渡來自儘ニ上陸仕剩領分ハ死骸埋葬仕候てハ以後何様之義出來可仕も難計眼前ニ對州等之風説も粗承及候間上下心配仕兎角種々成取沙汰仕人氣居合不申當惑仕候精々御條約譯柄も申諭置候得共異人墓處御坐候てハ何分一統不穩義も御坐候上右場所ハ肝要之海邊ニて第一警衛向之妨防禦之備も不立殆迷惑仕候ニ付此段英船渡來埋葬之地ニ生立候前後勘辨も無之下々之者共之義ニ付兼而嚴敷申付置候得共萬一如何様之御面倒之筋仕出し可申哉難計左候得ハ先祖以來出格蒙御厚恩候家之義實以奉恐入候間右之段御憐察被成下何卒改葬被仰付且赤間開港之義容易ニ御差免相成候義トハ不奉存候得共自然御差免相成領分ハ異人

館等出來仕候節ハ舊來之備向一時ニ廢絶仕誠以歎ケ敷且領内暫時ニ疲弊仕候義ハ眼前之事ニ御坐候間家來共始領内一統動搖仕候てハ以之外奉恐入候義ト深心痛罷在候ニ付幾重ニも御高評を以一同安心之御沙汰被成下候様仕度依之前書上意之趣別紙系譜書拔并領海場所繪圖相添此段只管奉歎願候以上

八月五日

小笠原信濃守

十月二日

一紀州様方御同朋頭へ爲御物語之趣

神奈川方長崎箱館迄海路測量之義英國人へ御差許之段七月被仰出御坐候處右英國船八月十六日紀伊殿領分紀州牟婁郡へ罷越注進有之候ニ付所々へ諸役人并船をも用意爲致置候處同廿日日高郡由良湊へ已刻著船上陸之上海路致圖取且小船ニて湊内致測量同廿七日迄碇泊同日已刻

頃出帆夫の海出郡大磯浦へ酉刻頃著船去月朔日迄碇泊右の内近邊高キ
山へ登候處測量其邊海岸向者勿論阿州淡州之島々迄圖取同日辰刻頃大
崎浦出帆加太浦へ午刻頃著船小船にて田倉崎邊乘廻り上陸をもいたし
同日友島へも上陸所々致測量同四日巳刻頃出帆淡州由良湊へ向ケ罷
越夫の南方へ航行候處同六日又々日高郡由良湊へ申刻頃著船翌七日卯
刻頃出帆牟婁郡沖へ向ケ航行候旨尤前段滯船之内食物炭等買受爲積入
候旨をも浦方へ届出候段國許へ申越候此段各迄及御物語置候
右奉承知對馬守へ可申達置旨申聞候由ニ御坐候

御勘定奉行外國奉行御軍艦奉行御目付

水野筑後守

伊豆國附島ニ御備向取調且小笠原島御開拓之御用被仰付候ニ付る者都
合次第御軍艦へ乗組彼地へ乗越巨細實檢いたし厚く勘辨之上見込之趣
可被申聞候

御勘定奉行
外國奉行
御軍艦奉行
水野筑後守
伊豆國
右御書付

書面之通相達候間可得其意候 右書付大和守渡之

久文元年辛酉八月伊勢神宮之神官衆へ被下候敕書之寫

今度從英國測量之儀申立候趣從

神宮言上之儀有之初る被

聞召御驚思召候

神宮之儀者兼る被

仰出茂被爲 在候儀故於關東如才無之儀とハ被

思召候得共自然 神三郡志摩國等へ立入候るハ對

神宮御尊敬之御廉茂不相立被爲恐入候御譯ニ

皇國之御瑕瑾とも可相成必 神三郡志摩國等へ夷人共不立入候様猶又

堅固ニ其役々へ茂申渡相心得候様被遊度候間早々關東へ申達關東ニ

於テ取計方被

開召度

思召候事

別紙之通武邊へ被

仰達有之候間若右御往復不相濟中夷人共立寄候儀茂候ハ、前條之意味を以可及應接事

八月

上卿 徳大寺殿也

八月十四日伊勢著之事

右之次第翌十五日 司よ

神宮御役所へ御注進申上候事

私儀此度供手^{奉カ}之公卿殿上人等御馳走御用被 仰付候處是迄柳席にて敷使院使宮家五攝家等御馳走付被仰付來候得共此度諸々先例相見不申新

規之義ニ付勤向之義ハ取伺之上萬端高家衆へ問合相勤可申奉存候得共是迄之振合にてハ著輿前日御馳走所へ引越相勤來候義ニ御坐候然る所此度ハ重御使之義ニも無之又宮家五攝家等之重キ家柄ニも無御坐候得者著輿發輿上使輿向御使并登 城等之廉立候節者相詰其餘御用無之節相詰不申一兩日置御馳走所へ罷越安否窺家來共取締向等申付右之外朝夕安否窺并出入之先立等爲名代家老之者爲相勤申度奉存候其上御馳走所之義未御達ハ無御坐候得共此度ハ先例無之多人數ニ御坐候得者手狹混雜ハ申迄も無之間敷品^{數カ}ニ寄夫々割渡も如何可有御坐哉殊ニ私義高直被仰付候得者召連候家來共も多人數ニ相成候ニ付旁手狹差支筋も可有之處兼々而已相詰候儀候得者居小屋向餘程相減候ニ付夫而已都合ニも相成御差支も有之間敷と奉存候且又此迄拾萬石にて者御馳走人相勤候並合も無御坐初^初之義後來之規則ニも相成甚心配奉存候何卒右廉も相立候様仕度義ニ奉存候ニ付旁不苦儀ニ御坐候得者右之通被仰付候様

仕度奉存候依之奉伺御内意候以上

八月

溝口主膳正

今度供奉之公卿殿上人拾三人馳走方私井島津淡路守へ被仰付候處右御馳走人之義ハ高割にて心得候様高家衆方被仰達候左候得ハ私義ハ八九人位も引受ニ當と奉存候尤是迄勤來候 敕使院使等ニ對し候てハ都而御手輕之事も可有之候得共御馳走被仰付候義ハ疎略之御取扱も難相成奉存候處是迄之振合を以勘辨仕見候ニ 敕使兩卿にて是ら不容易事多混雜仕動せしハ行違筋等出來仕候處此度ハ九人以上ニ相成候てハ何分も行届兼可申奉存候就中膳中ハ御用之口往來留ニ相成諸家使者等ハ勿論御用にて被參候三高家衆迎も膳濟迄被指扣候振合ニ御坐候處短日之折柄多人數之義彼是半日程も相懸り可申左候てハ品ニより上使又ハ御使等之節も御差支ニ可相成哉と奉存候尤一卿每夫々家來役々差出

候義ハ在所表方爲呼登候得者差支筋無御坐候得共繰出し候役場ハ只一ヶ所ニ御坐候間自然相渡追て相成何分問方合中間敷第一私壹人にて朝夕之窺多人數之出入送迎先立等も可仕義ニ候得共是又行届兼可申奉存候併餘り乙甲ケ間敷様も可被思召候得共御馳走所之義も先前手重之振合にて定式之取計事も附届之ヶ所多誠ニ手數相掛り候事而已ニ委細ハ其筋掛り役人中にも承知之通ニ付多人數ニ相成る者迎も平等ニ行届兼可申甚心痛仕候義ニ候得者依之勝手ケ間敷義恐入候とも公卿方五人丈ケハ御馳走方にて引請被仰付 敕使院使等之振合見合家來指出爲相勤殿上人之義ハ御大禮之節ニ參向之高倉殿右衛門殿振合を以公邊にて御賄被仰付被成下右賄御入用金者勿論殿上人入用人等ハ御馳走方方指出候様被仰付被成下候様之義も出來仕間敷哉左候者誠以難有仕合奉存候相叶候義ニ御坐候者右様被成下候様仕度奉存候此段奉伺御内慮候以上

八月

右之通り八月廿三日出翌日持出

和宮様御下向之節御道固御警衛被仰付候向々々違候義申上候ニ付
和宮様御下向之節御道固之義ハ御道筋へ罷出居候義ニハ無之全枝道間
道之御警衛相心得候事ハ付右之心得を以御固筋之義面々見込次第充實
ニ相立候様可被致候尤見込之趣者近々拙者共上京之節於其場所得と可
承候
右之通り可被心得候事

八月

神保伯耆守

小倉九八郎

和宮様御下向之節御先御跡御固之者心得方
御旅館前後ハ屯所設置晝夜勤番可致候事

一御供之前後御警衛相建候場所并御用濟引拂候之義ハ都而支配向方可爲
致指圖候事

一御警衛罷在候家來何も強壯之者相撰召連候小者ニ迄手人指出難人等
ハ相省可申候勿論雇人馬等ハ無之様可被取計候右之通り可被心得候尤
拙者共近々上京之節御警衛筋見込之趣其持場々々於て可承候間心得候
者差出置可被申候事

八月

神保伯耆守

小倉九八郎

此以下六枚皆日記之内へ寫し込可然分を共寫し置候間綴り置

一昨々十四日英國書記官マイビュルグと申者御老中安藤公へ拜謁相願
同人申上候事件日本沿海測量之義御坐候同人建白仕候主意ハ私右マイビ
ル分稱ス相考候ニ右測量之義者去年中ミニストルハ測量一件願出候節台下

御答ニ者其義ハ其時ニ至リ又々商議可致様御申聞之由ニ付ミニストル
ヲ御許容有之候事ト存支那在留之海軍總督ト相談之上此度測量船三艘
ヲ艦裝シ長崎ヘ來同所奉行ヘ通辭借用仕度段申出候處於江戸表未御沙
汰無之趣ニ付御貸渡ニ相成不申由ニ御坐候右者日本海岸多分諸侯之領
分ニ付行違等有之も難計候間心を用御願申上候義ニ御坐候依之私ヘ申
候間來右之趣又々以書簡御願申上候處日本ニて精密ニ致測量繪圖相送
可申様被仰渡候得共日本支那等之繪圖ト西洋風トハ大ニ相違仕候間何
分拜見仕候ても難相分且海岸測量之術ハ餘程六ヶ敷事ニて毫厘を誤候
ても千里を誤り候ニ至リ此術ニ極テ精巧成人物おえでハ難出來候何卒
右之段急速海岸筋ヘ御觸渡可被下候其段ハミニストル義既ニ歸府可仕
處今以其義無之候得共右測量船ニ至リ沿海を測量し海上を經可來候も
難計候安藤公御答ニ夫ヲ暴ト申者也去年中右一件ミニストル申出候
節又々商議可致様申置候間一應此方ヘ懸合之上測量可有之事ト存候マ

イビュルグ又申上候ハ彌海上方歸り候哉否相分不申候得共右様相考ヘ
候間申上候安藤公被申候ハ今日堅要^{緊カ}之事件ニ付拙者ヘ逢度よしニ候處
右之事ニ候哉マイビュルグ左様ニ御坐候右之事件位からハ外國奉行ニ
テ相決候間此後ハ同人等ヘ可被申聞候マイビュルグ私ニ於テハ一大事
ト相考候間拜謁之上申上候

五月十七日認

一 神奈川表ヘ英國軍艦壹艘入港仕候右船中之者食料米壹俵同所市中カ求
歸候を番人相正し候處船將共大ニ怒リ訴申候其趣ハ是迄幾度も米を求
メ取歸り候處番人カ答候義壹度も無之候然ルニ此度指止候者何故ニ候
哉承度由申出候奉行カ答ニ條約書第四ヶ條ニ日本產物之内米麥ハ積申
間敷段明白ニ記し有之候答候^{由脫カ}○夷人又々申出候荷物ニ積候者條約ニも
禁制ニ候得共國人等滯留之食料も十分ニ與ヘ可申段明白ニ記し御坐候

由申募り大論ニ相成申候

一和蘭コンシユルブルークと申者カ外國奉行へ書翰指出申候書中之文意ハ開港以來平人江戸表へ出候義嚴ニ御制禁たりし處此度蘭人シーボルト御呼立ニ相成候者如何成譯合ニ候哉同人義ハ和蘭政府ニ於てハ全ク平人ニて無位無官之者ニ御坐候日本政府ニ於てハ右様御取計有之間敷等ニ相考申候併し日本政府ニて平人御呼立ニ相成候を私カ彼此申上候譯合ニハ無之候得共既ニ明白御制禁も相立居候事ニ候得者此度シイボルト出府之義ニ付てハ一應爲御知位ハ可有之筈と相考申候右之段御辯解承度段申出候

五月十九日

前日外國奉行衆カ亞國へ商船貳艘御買上之義御頼ニ相成候處右御返書差出申候其趣ハ御頼之商船貳艘早速國許へ申送候今年中ニハ多分參り可申候得共無相送處ハ難申上候價も來著之上なれでハ相分兼候尙本國

カ答書來著次第巨細ニ申上候趣ニ御坐候

横濱新地堀割向地英國軍艦物置場ニ仕度段先日御願申上置其後御免ニ相成候ニ付神奈川奉行へ此段懸合候處相渡不申候間早速御渡有之候様御沙汰御願申上候毎度神奈川奉行カ萬事被指留甚迷惑仕候以後右様之義無之様御申達被下度此段相願仕候様申出候右ハ英國書記官マイビエルク申上候

蘭人シーホルトカ蘇士迄之使節船英船を御頼可然段申上候所使節船カ兼て佛英兩國へ御頼切相成居日數も相定置候ニ付未支度調兼候間其許深切者辱候得共相斷候段竹内下野守殿桑山左衛門尉殿カ書簡參申候一先日申上候通り此度英國軍船之大將カ命を下日本海岸深淺測量暗礁沙洲等ニ至迄深索仕度候ニ付此段海岸御掛御大名様方へ御沙汰被下且通事壹人借用仕度段申出候然る所昨日返答御送相成申候其文意カ右之段ハ一昨年被申立候節も申述候通り日本沿海ハ多分諸侯之領分ニ付右測

量等之義被致候てハ萬一行違出來之節互ニ爭論相起候も難計乍去海岸
測量之義ハ航海之一大事件ニ付此方ニて暗礁砂洲探索淺深等其外巨細
ニ詮義之上相違可申候間夫迄被相待候様致度趣御申送ニ相成申候

月日無之五月中之事歟

一昨日安藤公英國ミニストル井同國水師提督ホープ暨同國上海コンシユ
ル同道ニて罷出申候一ト通應接相濟別段人拂ニて申上度段申出其後の
事ハ相分不申候得共此度英佛魯等へ使節之義對州一條井東禪寺夜討等
之事ニ可有之處承り次第可申上候人拂ニて申上候節ハ安藤公右京亮殿
井英佛へ使節ニ被參候内壹人都合三人と英人三人のみニ御坐候最通詞
壹人相添申密談相濟候て後右コンシユル申上候ニハ先達而御頼送ニ相
成候日本商船支那へ御遣しニ相成候趣ニ付相待候得共私出帆迄ハ參不
申歸唐之上參り候ハ、御周旋可仕段申上候今日も密談未タ相濟不申由

ニて又々安藤公へ英人三人罷出申候

一 小栗公溝口公兩氏何も病氣届ニて引籠ニ御坐候其故ハ此度箱館へ參り
魯國コンシユルへ對面之上對州在留之魯人歸國いたし候様取計可申段
被仰付候處兩氏共箱館コンシユル位之命ニてハ迎も引取不申候ニ付支
那在留之魯國アトミラールに對面ニて同人之命を傳候歟又ハ魯國迄も
參り懸合不申る者迎も歸國仕間敷段被申立引籠ニ付多分御役御免ニも
相成可申様評判仕候

西七月十日

御書翰 安政七庚申亞墨利加へ使節御遣之節也

うや／＼と亞墨利加合衆國の大統領の文をとよまばさきよ下田奉
行信濃守源清直目付肥後守藤原忠震等も仰て貴國の欽差全權巴兒利斯
とはありむつひのけりをさた死てものうりかうるき契りのあるしふみ

此邊本ノマ、

茂徳たへ江戸のつゝさよゆ死をかせしむいままたことよ奉行豊前守源
正興信濃守源範正目付豊後守源忠順等こちきりれたるしふと茂をたし
めて華盛頓のつかさよいたぬ志むこれとめていたりふのくこゝろいと
亦もころなりかれこのよちふた國の志たしみによゝつくましえへ
こ世々よのりえざるべしいまこのつゝひみたりれおさゝえよええひ
まおぬるものふしゆせのともよま心茂のへへておとものせよるしをへ
て志たしと茂徳つくしはたその國も志えけくやを志のぬむみと茂おを
ふりふそ

安政七年正月

源 御 諱 御 判

貌利太泥亞格外公使全權ミニストルエキセルレンシールセルフヲ
ールトアルコック

以書簡申入候箱館表新築立地所之義ニ付てハ先般申入候趣も有之候
處右地面十畫よなし其一畫ハ政府建物之用よ供し其九畫ハ外國人居留

地と相定尤地稅之義ハ同所海岸附我商賈賃借地代之振合ニ準シ可取立
積昨廿五日亞國ミニストル對話ニて談判決定せり尤巨細之義ハ同所奉
行各國コンシユル致商議可取極間其段同所コンシユルへ通達有之度此
段申入候拜具謹言

萬延二酉年正月日

久世大和守花押

安藤對馬守花押

佛蘭西サルゼタフヘールエキセルレンシートセンデベクル

右同文言

亞國ミニストル

以書翰申入候今般蝦夷地ニ於て鑛山等開發檢査之爲メ貴國坑師之内最
其業ニ熟練之者兩人相雇度候間右呼寄方早々取計候様頼入候尤壹ケ年
給料等も略致承知度且貴國ニて相用候乗車并荷車各種壹輛宛取寄方は
又頼入度如此候拜具謹言

月日欠

村垣 淡路守
津田 近江守

魯西亞へ御書翰

恭しく魯西亞國帝之下ニ申す我國と貴國と條約を結ひし方ぬの方數々の事務漸々つひでを以て條約之書ニ載る處大なるは是を施すに至りぬまゝの彼條約中兵庫及び西海岸の港を開き江戸大坂之市町にて外國人の商ふ業を營むべき條ハ契りし如く行さんとをせどもあるすの障の事柄をハ暫く開くるべき期を延むとす其細やなる事柄ハ外國の事務ハ關する我老中久世大和守安藤對馬守より貴國外國事務大臣ニ申入べしむハ親しく懇ある意をもてうへおこんふとを求む且貴國平安を祈るあり

文久元年辛酉年三月十四日

源 御名 御朱印

十月十七日 英吉利公使へ返書

貌利太泥亞格外公使全權ミニストルエキセルレンシルセルフヲ
ルドアールコツク

貴國十一月十四日附第九十一號之書翰落手貴國へ可差遣使節之義并館造營之事ニ付談判之爲出府可被致條委細致承知候扱以後途中之護衛ハ貴國之騎士を隨へざる此方付添之者被相斷候との段ハ愕然當惑之至ニ候右ハ全く其許と位階ニ應し被召連候事を差支ふる筋ハ無之候得共其頃對話之砌縷々面談いたし置候如く我政府ニ於て外國公使を庇蔭いさざる場合ニ陥り條約懇親の意を失ひ余等於て安らざる思ひ候事ハ勿論國民不折合折柄外國之騎士にて騎行被致おハ事情言語の通せざる所ハ如何様之行違を生むべき哉と一層の痛心を増候尤其許一身之護衛ハ右隨從之士にて行届可申哉ニ候得共若貴國士人之制、暴之所業を施す時ハまゝ兩國之交際へ支り我政府於て外國人を庇蔭せざる事ハ陥り甚心

痛いたし候畢竟其許の心情兩國の和親厚るゑまめんと思へる所か出る所かえんふて暫く此迄之通ニ被居置騎士隨從之義被見合あハ其許の懇切益深く信ざる所也猶餘り懇情を委細ニ申入をんる爲メ神奈川差遣し談判ニ可及候且親兵之附添粗暴之者を制右附添之者怠たる罪を糺し所置まへき間月日等委細神奈川へ被申聞候致度^{據説カ}自今粗暴之者有之時其節可被申聞候必嚴重所置いたし候不取敢返書旁此段申斷置候拜具謹言

十月十七日

久世大和守花押
安藤對馬守花押

英公使官姓名等前例ノ如ク認ム

我九月廿二日附書翰答書として貴國第十月晦日附九十號之書翰落手神奈川港横濱地所借料を一坪ニ付壹匁八厘七五ニ決定して尤是迄之分ハ西洋當年之末を以決算及以後ハ毎年西洋出來收納まへき事を其コンシ

ユルへ告命あらせし旨被申聞委細領承候右ニ付舊居留地之分借住せる人名坪數等取調其コンシユル可及懸合趣キ早速神奈川奉行へ申達候右再答書如斯候拜具謹言

十月十八日

久世大和守
安藤對馬守

英國軍艦蒸氣 船號ヲーデン 船將ロールジョン

乗組百廿六人^{内士官廿六人} 大砲貳拾挺 噸數貳千トン

西九月十一日申下刻江戸之方々入津當時神港碇泊船中補理

英國蒸氣測量船 船號レフエン 船司アレンドル

乗組三十五人^{内士官三人} 御軍艦奉行支配 福岡金吾 通辯御用兼 齋藤卯太郎乗組

西七月十九日入津同日江戸之方へ向出帆乗組如前

同廿一日江戸之方々入津同廿二日出帆同

同八月二日入津同十三日出帆同

卯太郎ハ通辯
之爲メ始終
近クヨリ船
乗カヨリ候
付度々神奈川
候ハ由也

由之探量之ハエル
方原不致用送ニ
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香
ハドハ出向ニ香

同九月三日入津同七日出帆同

英國蒸氣測量船 船號エルジーン 船將ハロース

乘組五十人 御軍艦方 塚原銀八郎乘組 豆州網代港入津

西七月廿九日入津八月十三日退帆同八月二日入津同十三日退帆同乘組同斷

英國蒸氣測量船 船號ドーフ 船司ボルク

乘組五十人 大砲五挺 外國方 荒木濟三郎乘組仕ル

西八月朔日入津同十四日退帆

英國蒸氣軍艦 船號エンブエリース 船將ギリブン名ポープ

アトミラール乘組 乘組五百三十人 大砲五拾五挺 廿日以前香港

出帆

西七月四日入津同七日江戸之方へ出帆

英國蒸氣軍艦 船號エンコンテル 船將デウー

乘組百九十一人アトミラールセイムスボツプ乘組居 噸數九百九十

大砲十四挺仕出し箱館五日已前出港
西八月十二日入津九月十一日出帆
同前 船號エンブエリース 船將ウエリオス
乘組三百廿六人アトミラール乘組居 仕出し長崎六日以前
西十月十五日入津同廿五日退帆

七月廿六日

水戸殿家來ニテ
出奔いたし候

大關和七郎

死罪 森山繁之介

御同家來三四郎弟
ニテ出奔いたし候

森五六郎

上同 蓮田市五郎
杉山彌一郎

外夷へ被爲對候御所置振等品々申唱銘々申合國許出奔致候剩多人數徒

黨を結び重キ御役人登
城之節御場所柄をも不憚及亂妨候始末不恐
公儀次第不届至極ニ付

御同來岡部藤介伯父ニ
て先達も出奔いたし候
死罪 岡部三十郎

先達も致出奔候身分外夷へ被爲對候御所置振等品々申唱ひ同藩關新兵
衛其外之者共俱ニ重キ御役人登
城之節御場所柄をも不憚及亂妨殊ニ新兵衛一同其場を逃去猶水戸殿領
内へ立戻り潜居罷在り候段縱令其節刀拔立騒候義ハ無之候とも右始末
不憚

公儀仕方不届至極ニ付

死罪 御家來にて出奔いたし候
金子孫次郎

外夷へ被爲對候御所置振等品々申唱重キ御役人へ可及亂妨手筈等同志

之者共へ及噂置其身ハ存含の筋有之連同藩清劍四男佐藤鉄三郎を召連
松平修理大夫家來有村雄介俱ニ身分を僞上京可致と仕成候段不恐
公儀仕方不届至極ニ付

同佐藤清劍四男ニ
て出奔いたし候

御追放 佐藤鉄三郎

主家御慎解之義を懇願いたし候ハ無謂義ニハ無之候得共右を歎願可致
と猥ニ下總國小金町へ出張いたし殊ニいつまへ歎致潜居主家御慎解之
義等周施可致候間同道致し可吳旨金子孫次郎申聞を難默止存候其カ連同人
俱ニ國許致出奔其上大關和七郎其外之者共重キ御役人へ及亂妨候旁場
所へ罷出候儀ハ無之候共右申合之趣承り不容易義とハ心付其儘ニ打過
殊ニ右孫次郎義存含之筋有之松平修理大夫家來有村雄介一同身分を僞
上京可致と仕成候孫次郎へ付添致旅行候始末不届至極ニ付
右之通御仕置被仰付候

七月

水戸殿家老衆へ

去申三月三日井伊掃部頭登

城掛ヶ外櫻田御門外ニ於て及狼藉候水戸殿御家來ニて致出奔候大關和七郎始今日別紙ニ通り夫々御所置被 仰付候此段可被申上候事

七月廿六日

上大原三位卿機密井時勢論

謹白

先達立カ弊藩之書生中谷正亮久坂其瑞參殿仕高議竊ニ相伺候由ニ委細之儀書翰ニ申來且輕卒伊藤傳之介ト申者歸來兩生ハ傳言承之候處誠ニ御父子様御揃御正義御雄論只々奉感佩傳聞候處御高議ニ曰ク此上者吾輩投一命候ツも身ヲ奴隸ニ致候ツも諸侯之國へ往き其大臣ハ致相對一藩一國只々聞糺之外無之候汝藩之大臣能面我歟若能面我者即決策西

此ハ戊午ノ册ニ誤リ可申之ニ誤テ此へ出

下との御事三人之者共書翰且口上ニ私見込ヲ尋來且異見ハを早く大原卿の下執事へ申上上脱カとの御事ニ御坐候私義未曾て御下風をも御伺不申上者之唐突ニ天下之大計を申上候事恐多奉存候得共三人之者皆異體同心之朋友之事ニ殊ニ兩生一度下風ニ拜趨仕候上者私義も最早同様之儀与相考申上度事御坐候私異見ハ別紙時勢論之通ニ御坐候就者主上御決心後鳥羽後醍醐兩天皇之覆轍ヲ御厭不被遊候者私之愚策言上之義尤所願ニ御坐候諸侯者不足恃と申候内公卿方間ハ親く御下向御說破被遊候ハ、四五侯位者立處ニ應ずるもの可有之歟一旦義旗舉り候上者雲霞の如く天關ハ拜趨仕候段者疑無之候併他藩之事ハ詳ニ不存候得共弊藩之義者兩職と申候者兩人ツ、家老中之要職有之候處當職者本ク哲仕る故世々國相と唱申候當時者浦負鞞と申者相勤候當役者寡君輔弼之任ニ江戶へ從行仕候故ニ世ニ行相と唱申候當時者益田彈正相勤居候兩人とも就モ有志之者ニ候處浦者老輩ニして其家來ニ忠義之者殊

ニ盛ニ御坐候益田行年二十六七歳英氣活發之人物ニ於當時家老中第一
統之人材ニ御坐候私門人ニ付幽囚中ニ於も兩度問者茂通し居候事ニ付
勤王之一義ふおいて尙々志を同計候義ニ御坐候浦之縁屬ニ前田孫右衛
門忠臣ふえて能人の言茂容を候者ニ於是弊藩之樂正子ニ御坐候前田之
縁屬ニ調布政之介と申者是者此節上京仕候三條公に得謁見候由ニ承
及候三條公之才を能々御聞糺被遊度此者者剛正比かき者ニ御坐候併お
ら頗る持重之論も有之候其他兩相者之役人とも孰れも異論之者ハ無
之候小吏無役之輩ニ至る者頗る篤志之者有之候右ニ付御父子様方御面
下被遊候者私屹度周旋仕兩相等謁見仕候様ニ可仕覺悟ニ御坐候私義幕
府之罪人ニ於幽囚之身分ニ者御坐候得共今ニも脱走上京も可仕候得共
只今上京仕候者一手も出さる前ニ又々幕府に被召捕何之益もかき事
ニ付御父子様御下向被遊候ハ、乍不及弊藩之力ニ於も御身柄を幕府へ
渡し候様之儀者斷然不仕候左候る弊藩御逗留中ニ弊藩有志之者共九州

に差廻し勤王之義相談可仕候最早角成行候義ニ付有志之士者悉く弊藩
まで馳付可申候左候ハ、萬々一失策ニ出候も私共同志之者計へ募り
候も三千人五千人者可得付此茂率て天下ニ横行し姦賊之頭ニツツ
獲候上ニ於戰死仕とも勤王之先鞭天下之首唱ニ相成可申私義本望不過
候とも諸侯不可恃候とも草莽之志者募と申事茂大坂陣等之覆轍をのミ
思合せ一概ニ危き事によふニ申者も御坐候得共是者事之本末茂不考之
類之論ニ於御坐候大坂陣者元來豊臣氏之爲ニ仕候義兵ニ者無之偏ニ大
野杯の姦計ニ籠絡せよをたるよ不過失職之徒之私黨ニ於殊ニ明智之士
ハ關原前後皆徳川に與し其與せざるハ大概時機を失せる鈍頑之徒ニ御
坐候況や徳川之武運日の昇る如く明主智將一世材能之士茂羽翼股肱と
せしとをハ大坂破固方其處御坐候今日之事ハ則不然諸侯之志ある者
已ニ少ニ偶其人あり共家老人杯の諸役人皆俗論を以て是茂沮む時者
能舉動するものあし此輩皆身家茂願ミ妻帑茂眷み斷然として大義を以

て自任まると能はず候故に其人柄知へし彼の募りに應ずる志士に至り候てハ禍福死亡已に其念茂断ち候る大節大義を後世に建明せんと願ふ者其の義に御坐候得者大坂陣と同日之論に者無御坐候扱又元弘之時を民怨に乗して北條氏茂誅伐し給ひ今も士論に因て徳川茂匡正し給ふと體勢各異なり難易も又不同候といへとも外夷に關り候事故今日迄も愚夫愚婦迄も切齒扼腕候氣有之候處を程能被致鼓舞候ハ、士論者民怨之端と相成可申候若此分を曠日彌久しく被遊候ハ、外夷の事日々人心に習染候る切齒扼腕之氣も沮喪いたし民怨のみなれず士論之崩れ行申事ハ必然に付何を士論之崩れの内御決策御下向奉待候委細ハ傳之介へ含差登し候間吳々も草莽之愚意願止之替申事又白調布政之介三條公迄申上候義未委細承り及不申候得共寡君より之直命ヲ受罷登候事に付寡君平素勤王之微忠ヲ申上候事と奉察候去るは是其外臣に者存候との断る無之事に付是へ者關係なく御下向被下候るも不苦候尤一應

三條家へ御内達之上に御所置被遊候事可有御坐候此段奉伺候別紙時勢論之義者何卒被達 叙聞 主上御決策之處竊に伏聽仕度奉存候事

九月八日

長門吉田虎次郎

時勢論

某竊に時勢ヲ觀察スルニ

寶祚無窮ノ大八洲ノ存亡誠ニ今日ニ迫リ誠ニ恐多キ也上ハ主上ヨリ公卿ノ歴々ヨリ下吾々士民ニ至ルマテ中々一ト通リノ心得ニテハ相濟サルコナリ抑徳川家征夷將軍ニ任セラレテヨリ以來外夷控馭ノ策著ニ其宜ヲ失ハレタルコハ一朝一夕ノコハアラサレトモ中ニ就テ近年墨夷ノ起リシヨリ以來彌以内外失策ノミ行ハレ條約調印ニ至テ極レリ去年墨夷ノ來ヤ某長大息シテ云神州已ニ陸沈セリ亡國ノコハ

皇國ニ於テ振古以來斷テ前蹤ナキヲナレハ如何ニシテ可ナランカ已ム
ヲナクンハ漢土賢哲ノ往跡ナリトモ學ハンカ伯夷叔齊ハ如何伊尹太公
如何翟義敬業ハ如何ト頻リニ苦惱スル内恐多モ
九重ノ敕諭天下ニ布キ草莽マテモ響キワタリ死者再生ノコ、チシテ幕
府奉揚諸侯協同天兵一時ニ墨夷ヲ膺懲スルヲアラントト日夜翹企セシ
トコロ豈圖ンヤ六月廿一日神奈川ニテ調印幕府明ラカニ
敕諭ニ違背セリ爾ノミナラス正論忠志ノ尾張水戸越前等ヲ黜罰スルニ
至ル某是ニ於テ

天子逆鱗如何ホトニアラント恐惶ニ勝ヘス而テ今ニ至テ何タル御所置
モ不承尤幕府尾張水戸ニ 敕諭ヲ被下且公卿親姻ノ所縁ヲ以テ二三ノ
名藩ヘモ御内書ヲ發セラレシヨシナレ是亦幕々シキヲモ承ラス加之
水戸ヘ奸臣ノ輩父子ノ間ヲ離間シ内輪甚タ不協和シテ近日正論ノモノ
武田彦太郎ヲ譴罪シ奸臣二人太田丹波守ヲ擧用シ 敕諭ノ趣イカ、致
安島彌次郎

ヘキヤト丸ニ打明ケテ幕府閣老ヘ謀リシニ閣老曰コノ 敕諭ハ傳奏隨
意ニカキシモノニテ眞 敕ニアラスト申タルヨシカ、ル次第ニテハ
中々以テ御爲ニハナラス尾張モ元來天下ノ務ニ疎キ國風ニテ竹腰コト
キ奸物甚タ跋扈スルヨシ去レハ天下頼ムヘキ諸侯ハ至テ少ク勤王ノ
ハ思モヨラス也 天朝格別ノ御英斷被成スンハ
神州ハ必ス夷狄ノ有トナルヘシ

皇太神ノ神敕モ今日切リナリ三品神器モ今日切リナリ豈痛哭ニ絶ヘケ
ンヤ幕府ニハ墨夷トノ條約モ相濟近日ノ内ニ外國奉行目付等ノ吏員墨
夷ヘ渡海イタス由然ラハ和親ハ益々固タマリ幕府ヨリ外夷ヘ許シツカ
ワストコロノ諸港モ漸々開市イタスヘク夷官吏民モ追々占據致スヘ
ク加之魯西亞英吉利佛蘭西等モ同様條約相濟殊ニ清國覆轍ノ鴉片ヲモ
持來ヲ許シ二百年來徳川家第一嚴禁ナル天守教ヲモ許シ蹈繪ノ良法ヲ
改除シ他日ノ患害已ニ目前ニ備リ今日ヲ失ヘハ千萬年モ待テモ機會ハ

決シテ有リナシ幕府

天朝ニソムキ衆議ヲシテ其私意ヲ逞フスルハ頼ム所ハ外夷ノ援ナリ然
ラハ幕府ニハ諸國義舉ノ起ラヌ内ニ早ク外夷ノ和親ヲ厚クスルノ計ト
見ヘタリ只今ノ形勢ニテハ

天朝ヨリ幾百通ノ 敕諭下ツテモ諸侯ヨリ何通ノ正議ヲ建白シテモ幕
府ニハ一向遵奉採用ハコレナク只々外夷ノ和親ヲ忽ナクノ和親已ニ堅
ル上ハ天下正議ノ者ハ悉ク罪ニ行ヒ又 天朝正議ノ公卿ヲ廢錮誅戮ニ
モ及ヒ其次ハ承久元弘ノ故事ヲ引テ

主上ヲ議スルニ至ランコ必セリ此度梅田源次郎等ヲ召捕候テモ推知ヘ
キナリ然ルニ 天朝今日ノ機ヲ失ヒ空論ヲ以テ害毒ヲ攘ヒ玉ハント有
リ實ニ恐多キコナラスヤ 天朝ノ御定算ハ蓋シ諸侯ノ赤心ニテ人心ノ
歸スルトコロヲ御待ナサル、ナルヘシ誠ニ勿體ナキコ也當今三百六十
諸侯大抵膏梁子弟ニテ天下國家ノ事務迂濶ニシテ殊ニ身家ヲ顧ミ時勢

ニ媚諛シ其臣ナル者御大事々々ト申コニテ人君ヲス、メ勤王ノ大義ナ
トハ夢ニモ説不申何程聰明果斷ノ人君ナル者決シテ薦舉ヲ企ルコ相成
ス勢ナク是尋常ノ諸藩然リ其奸惡ナル者ニ至テハ幕吏ニ連結シ其逆焰
ヲ助長スルノ類少トセス然ラハ當今天下ノ諸侯ヲ御待ナサレテハ終ニ
幕府ノ議ニ落伏セラレ其末ハ外夷ノ屬國ト相成

皇國ノ滅亡實ニ踵ヲ旋サマルコ也直ニコノ趣御落著被遊タクハ天下萬
民ノ信服仕リ義憤ヲ徹發スルノ御所置アラマホシキコナリ勿體ナケレ
ル 後醍醐天皇隱岐ニ出マシタレハコソ天下ノ義兵一同起リタリ爾ノ
ミナラスコレヨリ先 後鳥羽順德土御門ノ三 天皇ノ御苦難モアラセ
ラレタレハコソ建武ノ御中興中々一朝一夕ノコニハアラス孟軻カ云苟
爲善後世子孫必有王者矣君子創業垂統爲可繼也若夫成功則天也君如彼
何強爲善而已矣ト申タルモ思合スヘシ某カ覽ニテハ
主上大ニ天下ニ 敕ヲ下シ聞ユル忠臣義士ヲ御招集アソハサレ又尾張

水戸越前ヲ始正議ノ人罪誦ヲ蒙リ又ハ下賤ニ埋没スル者モヲ盡ク闕下
 ニイタシ外夷捷伐ノ正議御建アソハサレ度ヲナリ某向キニ屢叡山遷幸
 ノヲヲ議ス今前説ノコトク行ハルレハ遷幸ナキモ又可ナリトス 桓武
 以來ノ常都御持守遊ハサレ幕府ヨリ何程逆焰ヲ振ヒ悖慢ノ所置有モ御
 顧著ナク 後鳥羽後醍醐天皇ヲ目的トシテ御災藉ヲ定メラレ候ハ、必
 ス正成義貞高德武重ノコトキモノ累々繼出センコトハ必然ナリ 天朝ニ
 ハ徳川ヲ扶助公武一和トノミ仰出サル、故ニ徳川ハマス々々兇威ヲ逞
 フシ諸侯ハ悉ク徳川ニ頸ヲ押ヘラレ勤王ノ手足ハ不出其下ノ忠義ノ士
 ニテモ皆征夷カ諸侯ノ臣下ニ非ハナケレハ其主人ニモ先キタチテ義舉
 ヲ企テモナラズ終ニ天朝ニ志ヲ歸スル者アレモ志ヲ抱ナカラ老死イ
 タシ甚シキハ奸吏ノ手ニヲチ囚奴トナリ戮死トナリ終ニハ懸關ノ志モ
 日ヲ逐テウスク成行候也コレマテノ寛大ノ御處置ハ誠ニ凡慮ノ及フ所
 ニアラス御尤ト申上ンモ畏ルヘケレモ今ヨリハ 御果斷ノ時節到來ニ

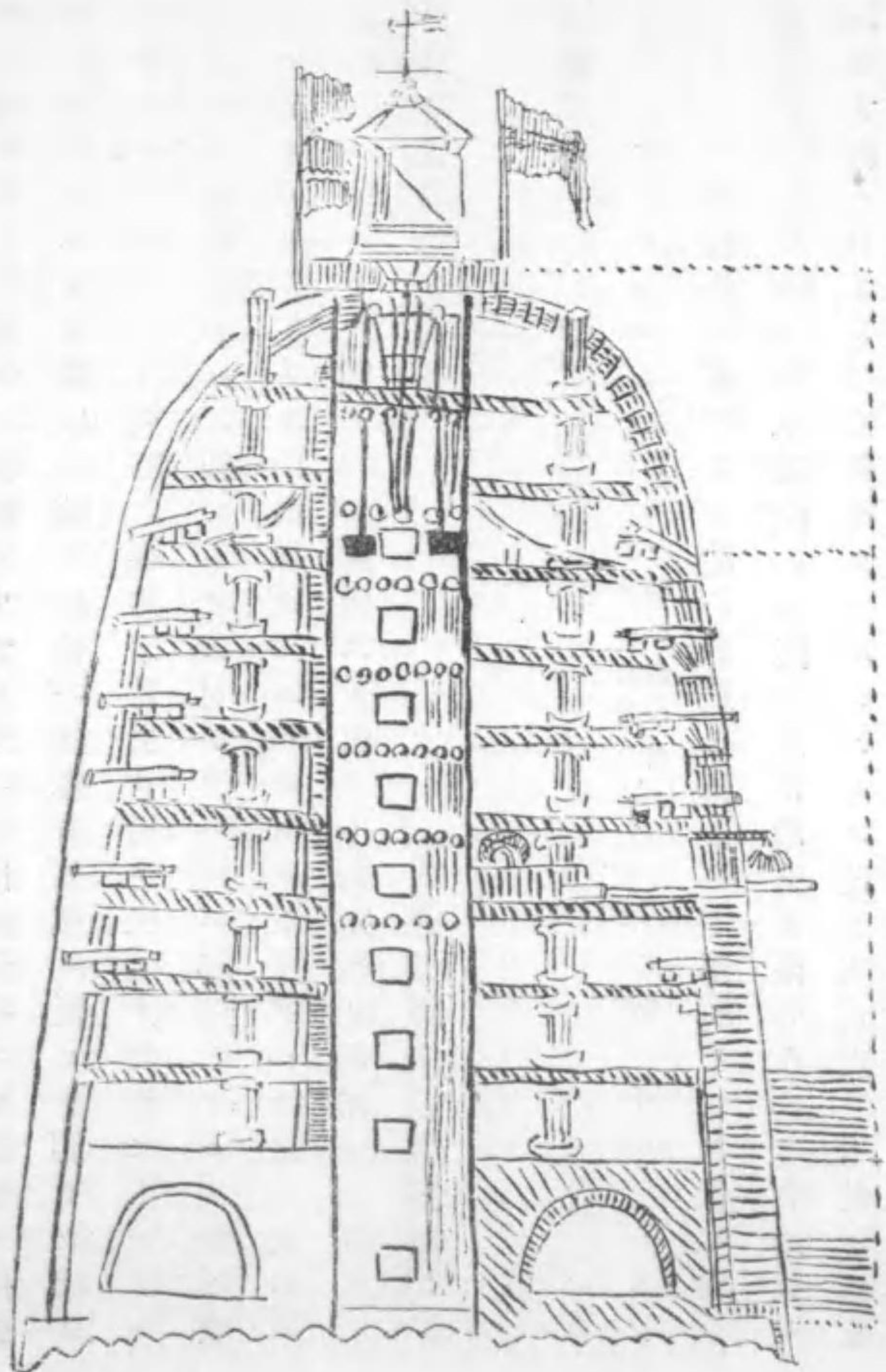
テ今年一年モ今ノ形勢ニテ御觀望ナサレテハ忠臣義士半ハ死亡半ハ挫折
 セラレ幕府マス々々兇威ニ募リ諸侯ハ益幕府ノ威ニ懾レテ而テ外夷ノ
 患ハマス々々深クナリ天下ノ事凡テ時去リ機ヲ失ヒテ如何モ手ハツキ
 申サマルコ必然ナリコノ論尤トオボシメサハ別ニ祕策アリコノ論不當
 ナラハ某モハヤ勤王ノ手段盡果タルユヘタマ々々主家へ徹忠ヲ效スノ
 外致方モコレナク亡國ノ苦惱適從スル處ヲ不知痛恨ノ極爰ニ止タリ

戊午九月念二日

草莽臣藤原矩方謹識

不動鐵樓 アイムブレギチーフル、

ロンドン、ターウエルン、ターウエルンハ旅館の名ふるべしロム於てウキルレム、シ
 ヨン、ホール氏首府の海門ハ敵の急襲ヲ備ふおと薄弱なるを世の爲メ
 ヲ憂テームス名河の及ひ倫敦ヲ防禦を設け敵患ヲ備へんおとを論說せ
 し以來大約一月として機關家ウキルレム、ホス氏と共に謀り不動鐵樓を



發明し由て貿易に關係する者ハ不虞の危難あるを述べて尙ヲ其發明せし所の工夫を子細に検査せんことを乞ひ次て又其様式及び圖稿を製してボルリントン、ハウスの公衛のローエル、ソサイチの官吏呈して諸侯及び有名諸學者の閱評を需れり後大約十四日にしてホール及びボスハ其論策の利を説辨するた先宿直に在りしに公衛チールム衛中の名の執政長官も此のよとに就き周旋したり○諸學家に由て國益を起せしハ其例多く且今般の建築ハ英咭王の海陸軍將士の同意せる所なれハ今其圖説をイルリューストレイテド、ロントン、ニュース注カに載せ世人をしてホール氏の需に應し公平の評論をささしむるに妨あるべし

ホール氏の著述せるロンドン、ウキキ、ポイント名書にハ分明に下件を論せり其論は曰く倫敦府無量の財貨の危き所以ハ敵襲に備ふる適宜の防禦を以てあり故にノール洲グレートウキン及びマブリンに各々不動

鐵樓一個を設くる時ハ河口より倫敦に侵入する者を懼るゝに足ぬす而して此三樓を築しに費用一百萬あるを其一百萬ハ首府内の財貨の安全の爲めとして一ポント毎々三フートルシグ一セフソルトニ五計に當るのを出さしむまハ之を償ふに足るべし此亦些細の冗費あり預メ備へて敵を逐ひ敵を防ぐを勢あるハ現在敵至る時之に對して安靜し得るの良法なるおとハ固より論を俟たすテームスハ宇宙の人民此の國に來て貿交する者の大術なるを以てホーメル氏時勢を察して以爲らく防禦の中心ハ必ず我ハ首府の河口に設るより利あるハあしと此の河口ハノール洲に由て中流より分て二海門となきり而して船艦の河に上る者ハ必ず此の海門より入えざるを得ず故にホーメル氏此の洲上に鐵樓を設けんと欲するあり○樓の裝置ハ爰に附屬せる圖より明かす○樓の中徑滿潮線の所に於て百二十フート此線より上樓頭に至るまでの高さ百三十フート線以下を併せ樓の全高ヲ計せば二百四十フートあり○

大砲七十門を備ふをき射眼あり七十門の内二十一門の砲ハ時々臨て各處に轉するを得べし○樓内ヲ分て千五百室と做す但し尋常ハ本數三分の一を以て足るべし○ホーメル氏又公私に説き閑散ある都下の少年千人をして會社を設け水夫とかし或ハ機關工匠術の如き有用の道ヲ學はしめんと欲す○樓内の底部ハ地中よ至るまでヲ穿て砂礫を埴め彈藥室とかま○樓の外圍ハ鑄鐵塊重サ各五トンなるものを層重し鎔金を灌て每個相接著せる故に恰も一塊の鐵屏をなし其厚サ二フートなきハ何等の砲彈と雖共破るおと能さるべし

鐵屏の重サ大約三萬二千トンにして木材及び砂礫の重サを併せ計をハ樓の全量大紙十一萬トンニ至るをし○火藥室ハ砂礫中に設けて落潮線の下に在り○樓頭に燈籠あり此の燈ハ隨意に上下をを下す時ハ通氣筒内に藏る通氣筒ハ中徑二十フートにして樓底より樓頭に達す通氣筒の主用ハ最も緊要にして就中蒸氣力に由り水筒を以てアルテシエ

ン井本邦掘抜き者より水を取り火藥彈丸を火藥室より出たし其他雜具を樓の下層より上層に上るにハ皆此通氣筒の内に於て事をなま○各層の樓板を支持せる柱ハ内室虛にして之ハ蒸氣を流通せしめ樓内の各處を温む難破船のとき救難船を以て人命を助くゑき仁惠の備ふるも此の首府の財貨を庇護する洪大の建築に於てハ不用の贅論に非ず

此の策論他人の庇護を得んる爲メ人情も諛り僥倖を求るおとかきハ我輩の之を洪大非凡とする所あり其故ハホール氏父母の國を思ふ丹心よ
り私財を散して獨許の利を求る必す其策の變革をゑらさるるを主張せずして他人の之を改正せんおとを乞へり而して唯ニ其希望する所ハ政府より直に命を下し不列顛貿易入利の大數の内より費用を出して其策を施行するゝ或ハ此の費用を以て足らざるふと前知すゑき時ハ本國より扶助して有名の大業を遂げんとするに在るのミ

九段込方込メ

一節一舉動

左ノ手ヲ以テ銃ヲ右ノ臂ノ高サノ處ニテ把ミ身ノ正中ニ對シ持來スナ
リ而ノ右ノ手ヲ以テ最上帶マテ送り銃ノ下部ヲ兩足ノ間ニ置銃身正面
ニアル様ニシテ巢口ニ近キ處ヲ左ノ手ニテ把ム但シ我體ヨリ三_二イ_一ンチ
_二四分_一隔ツ右手ヲ藥苞袋ニヲクル

二トレ||早合

一節一舉動

親指ト次指二本ヲ以テ藥包ヲ取り齒間ニ致ス

三開ケ||早合

一節一舉動

火藥ノ際ニテ紙ヲ喰ヒ切り親指ト次指二本ノ間ニ持チ巢口近ク持送り
其手ノ甲ハ正面ニスル

四込メ||早合

一節一舉動

火藥ヲ巢中ニ注キ玉ヲ紙ヨリ放シ右ノ手ト左ノ親指ト次指二本ヲ以テ
玉ヲ放解シ尖部ヲ上ニシテ巢中ニ籠メ右ノ親指ヲ以テ少シク下へ送ル

而テ親指ト食指ヲ以テ槳杖ノ最端ヲ把ミ他指ハ閉チル兩臂ハ身體ニ附著スル

五拔ケ||込矢

一節三舉動

一右ノ手ヲ延シ槳杖ヲ半分拔出シ其儘左ノ親指ヲ以テ撐へ而シテ右ノ手ヲ以テ槳杖ヲ巢口近ク握ル其仕方小指ヲ上方ニナシ爪正面ニナル様ニスベシ而シテ親指ハ槳杖ニ沿へ延ス
二再ヒ臂ヲ延シ槳杖ヲ管ヨリ拔出シ之ヲ其延伸内ニヲク
三槳杖ヲ轉廻シ其細端ハ左肩ヲ通過シ槳杖頭ヲ彈上ニ置其手甲ハ正面ニスル

六突ケ||早合

槳杖ヲ右手巢口ニ達スル迄壓入シ而シテ左手ノ拇指ニテ槳杖ヲ撐へ右ノ親指ト食指トヲ以テ槳杖ノ細端ヲ把ム其手ノ甲ハ正面ニナル如クシ彈ヲ室ニ送ル但シ臂ハ體ニ接ス

七收メ||槳杖

一節三舉動

一槳杖ヲ半分拔出シ之ヲ其儘左ノ手ノ親指ニテ撐へ小指ヲ上面ニナシテ巢口ノ處ニテ把ミ臂ヲ延シテ槳杖ヲ拔出シ之ヲ巢口ノ延伸内ニ在ラシム
二槳杖ヲ轉廻シ其頭ヲシテ左ノ肩ヲ通過セシメ管中ニ納メ右手巢口ニ觸ル、迄突込爪ハ正面ニナル様ニス
三右小指ヲ槳杖頭ニ置テ槳杖ヲ納メ其手ノ左ノ手ヲ臂ノ全長ニ延シ左肩傾カヌ様ニスベシ

八管附ケ

一節二舉動

一左手ヲ以テ筒ヲ其舉シ目ノ高サニアル如ク上ケ右手ヲ以テ銃把ヲ握リ半右向ヲナシ同時ニ右足ヲ左ノ足ト直角ニシ足心ヲ以テ左踵ニ對シ而シテ左手ハ下ノ帶迄滑送ス其手親指ハ臺ヲ傳ヒテ延シ右ノ臂ハ身體ニ接シ筒ヲ右脇ニ持來シ臺尻ヲ右ノ肘ノ下ニシ銃把ヲ身體ニ對シ乳ノ下

二、「インチー」ニ對シ銃身ヲ上トシ銃口ヲ目ノ高サニス
 二右手ノ親指ヲ以テ鷄頭ヲ半機ニ掛ケ諸指ハ鬼牆ト銃把ニ接ス右手ノ
 拇ヲ以テ雷冒ヲ袋ヨリ取り火門上ニ置キ拇ニテ押ヘ銃把ヲ握ル

九肩へ筒

一節二舉動

一筒ヲ右肩ニ致シ左手ヲ以テ押付ケ正面ヲ向キ右ノ踵ヲ左ノ踵ノ側ニ
 持來右ノ手ヲ以テ上ニ示セル如ク銃ヲ持ツベシ
 二左手ヲ速ニ左ニ垂ル、ナリ

構へ

一節三舉動

一、右手ヲ以テ筒ヲ舉ケ左踵ニテ半右向ヲナシ右足ヲ左踵ノ後ニ置キ左
 ノ手ヲ以テ筒ヲ下帶ノ處ニテ握リ之ヲ肩ヨリ放ス
 二、兩手ヲ以テ筒ヲ下シ銃身ハ上ニアリ左ノ拇ハ臺ニ沿ヒテ延シ臺尻ハ
 右ノ前肘ノ下ニナリ銃把ハ右ノ乳ノ下ニ「インチー」ニ置キ巢口目ノ高サ
 ニ對ス左ノ臂體ニ接シ同時ニ右ノ拇鷄頭ノ上ニカ、ル諸指鬼牆ノ下ニ

テ夫レニ對ス

三、鷄頭ヲ張起シ銃把ヲトリ銃尾ノ位置ヲ動カスコトナキ様ニス

狙ヒ

一節一舉動

拇ヲ據軌ニ掛ケ左眼ヲ眇シ狙フ「ゲウエール」ニ異ナルナシ
 二列ニ組タル兵ハ一列兵右ノ臂ヲ稍ヤ高クシ二列ノ兵ノ狙ヒノ爲ニス
 二列兵足ヲ右ヘ出スコトハ「インチー」ナリ
 打放シ込ヘノ合アレハ銃ヲ下スト一同ニ足ヲ揃ヘ上ニ說示スル如ク銃
 ヲ下シ再裝藥スル
 打止メ肩ヘ取モ狙ヲ待テト云モ替ルコトナシ但シ狙ヲ待テノ後肩ヘノ
 合アラバ鷄頭ヲ半段下シテ肩ヘスルナリ

鈴木大雜集五

五百二十四

鈴木大雜集

六

乙集

雜集

文久辛酉
鈴木大

共五册六

神奈川日記抜書

六月廿七日蒼天南風にして烈風之

一水浪之者小船にて江府へ來ると之浮説紛々有之に付出入之大小舟に至迄改方としてフツチ沖へ御船旭丸と相唱候御舟一艘御差廻に相成候尤右乗組人數之義ハ浦賀奉行御渡に相成同所詰之與力同心とも乗組罷在候よし

一前同様改方として下總洋へスクチール一艘御差廻に相成候右乗組人數

ハ俗事方并講武所教授方乗組罷在上之御人計り之

一四五日以前戸澤 守之人數神川在留之コンシユール館之固被仰付候よし付著いさし候隠岐守人數ハ英コン之宿寺警固戸澤之人數ハ亞コン之旅館を警衛罷在候

七月十一日

一今日亞之醫官一人上府附添之者四人送る

一英之軍艦當港ニ碇泊いし居候中ノ近海之測量として三艘出港いし候内一艘ハ長崎迄參る一艘ハ奥州邊之近海を測量之ニ先出ル一艘ハ西海之近邊を測量之爲出ル

但し奥州近海と西海近海之測量舟へハ御徒士目付外國詞役一人定役一人宛乗組居候よし

一前同様之振合を以長崎港行之軍艦神川方同心乗組セ可申哉之段英人へ申向候處早速承知ニ付則ち兩人差遣るを積ニて手配罷在候處出港之砌ニ臨み被申聞候者長崎迄參るとて案内を頼候得ハ各國之者へ對し外聞も悪けそハ折角之思召おきとも先御ニ及ぶと之答ニ付案内之者ハ參り不申候

七月十三日

今日御舟當番ニ付講武所方ノ出張之人數ハ何十人ある哉問合候處是迄一組十五人宛之處東禪寺事件已來御人増ニ相成十八人宛之由四組都て

七十貳人あり御手當ハ一日ノ金貳朱宛あり
同十五日

夷人とも十里四方中之近在へ遊歩ニ罷越候節之取扱方被仰渡候ニ付村々名主共々之請書左之通り、別ニ寫ス

港崎町廓内高札左之通り 同斷ニ付別ニ寫ス

一此度御軍艦方々左之通り繪圖面を以御造製之義伺出候處伺之通り被仰付候云々下略之

右船數七艘大ニて八間ニ貳間小ニて五間貳尺六寸ニ一間一尺餘之此亦略之

七月十六日

一今日若年寄井左之役方神局へ著夕七ツ時頃運上所へ御越ス異人商館を御巡視夫々虎を一覽黄昏頃船よて神川へ歸る

若年寄 酒井右京亮 御勘定奉行 松平出雲守

外國奉行

水野筑後守

御目付

淺野一學

御祐筆

兩 人

神奈川奉行

松平石見守

御使番

兩 人

外ニ

組頭 調役 定役

七月十七日蒼天輕風ニ

一今晝八ツ時頃、戶部御役所ニ於て英佛ミニストルハ酒井右京亮殿御應接有之ニ付八ツ時貳分頃英佛之ミニストル御役所へ罷越右京亮殿と一時計何歟御應接有之候得共其場へ近寄かたニ付對話之次第一向相知を不申七ツ時頃、應接も相濟候ニ付彼等を饗應し候た先種々之酒肴を設

應接所之坐列左之通

彼ノ方 英ノミニストル 同通辯官 同コンシユール 佛ミニストル

佛ニ 同コンシユール

此ノ方 酒井右京亮殿 御勘定奉行一人

外國奉行一人

御目付 兩 人

外ニ 松本十太郎

御祐筆 井組頭

神奈川奉行 兩 人

御使番 兩 人

調役定役ふ至る迄應接場之縁類ニ扣居申候

右之通り左右ニ列坐罷在候事

彼等へ差出候酒肴大概左之通り

一サンハン酒 五十本程 一葡萄酒 五本 一脱カ 紫蘇酒 五本 一かまて

一ハシラ 一ハン 一鶏之蒸焼 一ぶさの蒲鋒 一夷製之瓶入漬物 貳本

一蝦えてんぬら 一吸物 一さしみ 一鯛えてんぬら

右之酒肴種々差出し互ニ酒興相醸し黄昏過迄有之候彼等歸館之時ニハ護送として定役兩三人同心廿人程外ニ下番之者横濱迄罷越候

一予今日之給仕役として其場へ立寄應接之始終等相監るニ若老彼等を遇まらざる之憾懃成事實ニ歎息せり只一向ニ彼等之氣を快からし先んと相見

候みそ悲しけり

七月十八日

一佛之ミニストル館にて酒井右京亮殿へミニストルを饗應有之候
 一蘭商舟一艘入津此舶虎一匹積來る外豹様之黒形之獸一匹積來る
 同廿日

一神奈川奉行竹本圖書頭來ル神川へ滞在ス
 一蘭人シイボルト江戸から來ル横濱へ在留ス
 同廿八日

一今日播磨守殿と圖書頭殿は英之コンシユール館ふて饗應有之
 同廿九日

一當時碇泊之黒船左之通り
 一亞商船 六艘 一英商船 三艘
 一蘭同 四艘 一佛同 一艘

外ニ亞國スクチール商船 壹艘

一英軍艦 貳艘 一佛軍艦 壹艘

酉ノ七月

一昨十日外國奉行水野筑後守殿津田近江守殿兩人亞國ミニストルハルリ
 スと對話有之申候奉行尋ニ英佛上使を兩人共濱御殿内へ引移候事ニ相
 決候其許ニハ如何いさし候哉

ハルリス私も兩三日の中引越候積ニ御坐候

奉行ソレガット井マルヘット船貳艘軍艦ニ仕立度候亞國にて右船出來
 可申哉

ハルリス出來申候

奉行代金ハ何程ニ可有之哉

ハルリス私も委敷義ハ存不申候得共八十万ドルラル位之事ニ可有之
 相考申候

奉行相頼申度候不遠是方又々相談可致候
奉行亞國戰爭之模様を如何ニ候哉

ハルリス私も心痛仕候得共委敷義ハ存不申候合衆國兩部ニ分ク戦争
ニ相成申候其一部を北部と唱候大統領大將ニ御坐候又一部を南部と
唱ヒ候側のスラーフ方にてヒホと申者大將ニ御坐候

一英國ツニストル井支那在留之水師提督九日十日兩日安藤公罷出人拂ニ
テ重大之密談申上候趣御坐候其趣ハ當春以來對州ニ在留仕候魯西亞人
共を追拂候一條之由承申候

公邊方右之水師提督へ對州へ魯人致退去候取計方御頼被成候思召之様
子ニ御坐候

七月晦日於東禪寺外國奉行英國之通辯官ニ對話

一北京よりミニストル兩人爲見舞罷越可申候

一同 兩三日滯船直様香港カ上海致候

一同 御殿山ミニストル館之義早々相願度候

一同 昨年中モス一條ニ付ミニストル方罪之方不筋之趣ニ本國政府方書

翰致來右ハ國法ニ違ヒ候義ニ有之ミニストル申渡候答ニ不致様ニ

亦此後モス義日本方勝手次第ニ再渡差許相成申候右ニ付千トルラル

之過料差出候處右も同人ハ戻し候様相成申候然ル處御役人ハ相渡候

後ニ付本國政府より同人ハ戻し候様相成候間入御聽置申候

日本 一右ハ如何之義ニ有之哉

一規則ニ相觸候義有之且日附等之義間違ヒ其外ニケ條有之アトホカ

ト官 一ト官ハ罪人之理非ヲ取計いし役人不調ニ被許候義ニ相成候

一モス取押候節役人粗暴之取扱有之趣も申越候向後英人之内如何之義

有之候与も手込ニ取計無之様致度尤ミニストル方事務宰相ハ談判相

濟候上ハ格別夫迄ハ直様コンシユル一么へ即時ニ御引渡可被下候

日本
一 右粗暴之取扱与ハ如何之事ニ候哉

一 右譯ハミニストルガ事務宰相ニ申上候細倉謙左衛門殿扱粗暴之義有之候同人義ハ外國人ニ關係無之處ニ爲取扱候様致度候

一 先日東禪寺ハ入込候亂妨人ヲ防候怪我人ハ御手當御遣ニ相成候様仕度旨申上候處何を快方之上と彼仰聞候得共快方ニ相成候者計ハも早々御遣し相成候様仕度候

奉行
八月六日神奈川奉行英コンシユルハ對話

一 山手コンシユル館出來ニ相成候間引移候様致度候

一 近日中引移可申候

奉行
一 承候處アメリカニ混雜之事有之よし承候實否承り度候

一 實以戰爭有之候夫ハ先頃飛脚舟參り承り候追^{新カ}親聞紙來候時者早々可申上候右者此度戰爭之國ハ北アメリカ中^ホ之南北ニ打分居候國ニ市人^ホ与市人^ホ与之戰ニ其兵端之根元ハ南ニ北^ホ之方を錢を以人を備ひ相遣

アメリカ國ニ
男女老少不殘
ニテ億至
ニテ人口故此
ニテ人故此
ニテ人故此
ニテ人故此

候仕來之處餘り南ニ不仁之遣方故北之方ニ見るニ不忍兵を起し候よしニ御坐候北之士ハ^ホ貳億南之戰兵士ハ^ホ一億貳百万ニ候追^ホ而盛ニ相成可申候夫故各國之軍艦も右之處ニ參申候

一 東禪寺一條ニ付何り仙臺より事務宰相^ホ申立ニ相成候事有之よし御承知被成候ハ、承度奉存候

奉行
一 其外一向不存候

八月九日和蘭シイホルトハ奉行對話

一 十二日程之日數ニ^ホ養生之た先當港ニ來ル最早日限ニ相成候江戸ハ何とり申來不申哉未タ七八日も養生致度候

一 御國之事ニおゐてハ御爲ニ相成候義^ホ何成とも可申上候已ニ先頃國元にも御爲ニ相成候事申遣候

一 歐呂巴洲之中より何り海岸筋之事ニ付戰爭ニも及候之事風説有之候併

し急之事ニハ無之候

一同 一私も壯年之時ハ諸方ニ名を賣候得共當時老人ニ及ヒ不被相用貴國之事

ニホハ精々骨折可致候

一同 一索漏生ハ至ホ温順之國ニホ陸軍ハ盛ニテ強く候人氣ハ人律も有之私ハ

大ニ頼敷存居候私の妻ハ同國之者ニ候

八月九日和蘭コンシユルセ子ラール館ニ於テ奉行對話

奉行 一兩都西港延期之義事務宰相申聞候處右御返事ハ書翰を以御返事ニ可及

旨被申付候

一同 一江戸へ通商交易場を開度趣之義ハ不容易義ニテ其譯ハ當時外國と通商

交易も盛ニ相成物價も沸騰自然人民も動搖いさしへく何分此儀ハ不容

易事ニ候追ホ宰相方も可申入候

一同 一昨年蘭人殺害御手當之儀事務宰相へ申聞候處セ子ラール被申候如く

國へ殘居候妻子を御憐ミ有之候得共行立ニ相成候様ニハさし遣べし併

セ子ラール申通償金ハ不差遣候

一夫ハ強テ私方償金を乞ふと申譯ニハ無之右一條ハ本國ニ在候政府方申

來候此申來候趣ハ全ク殺害ニ相成候一條何共沙汰も無之候得ハ如何相

成居候哉承度よし私迄問合ニ付夫故申上候

一同 一國ニ在る妻子とも夫殺さる候ハ死困窮ニ及ヒ候を見兼候故國ニ在る執

政方申來候

一同 御手當の償金のと奉願候譯ニハ無之候併し右妻子貧乏を御憐被下度殺

害ニ逢候者ハ船持ニテ一ケ年八百トルラルを利益を得候右へ一ヨリと

歟ニヨリと歟割合を以御手當不被下候ハ、國ニ在る妻子とも僅渴ニも

及ヒ候譬ふ見るふ八百トルラル之株を失ひ候者も同様也

日本 一夫ハ御手當ハ妻子之行立ニ相成候様可差遣候得共日本ニテ人を殺候て

も償と申金無之親を殺も亦ハ兄を殺セハ其罪を以罰ニ事務宰相ニ於テ

も如何にも妻子之貧窮を深く氣之毒ニ被存候得共何を御手當之儀ハ早々書翰を以可申入候
右之外種々引合も有之候得共申上候迄之義ニ無之故ニ略ス

神奈川日記抜書

八月十六日

一外國之士官亦ハ商人醉興ニて市街徜徉越前守殿巡警之番士伍間ニ立入鞭杖を以打擲不法を働キ候儀も度々有之候故已來右様之所業ある時ハ手荒之取計候哉も難計其趣配下之者へ令し置候様可取計旨圖書頭殿名前ニて各國コンシユルへ書簡御差出相成候
一佛國ニ在る政府方横濱在留之ミニストルへ穀米一俵注文ニ付即ち御差廻ニ相成植付候よし
同十八日

組頭と英國コンシユル對話警衛等之義之略之

同十九日

一英軍船之士官一人豊前小倉ニ埋葬いし候處右改葬之義申達相成右ニ付英艦長崎迄航海之序ニ小倉へ立寄死骸アハクニ付棺を取扱申候尤横濱ニ墓所有之候てハ此地ニ葬と被存候右ニ付外國方同心一人通辯官一人見さく乗組として參る所不承知ニ付止ミ軍艦ハ出帆いし候
同廿日

一越前殿警固人數夜中市中巡警いし居候處度々異人共醉興ニて亂妨有之故ニ越前守殿方何歟趣意を御申立相成候よし右ニ付當分夜中巡見之義ハ見合候様御達ニ相成候尤警衛之人數ハ如元運上所構内ニ居申候各國コンシユルハ

以書簡申入候然ハ當港居留之外國人亦ハ軍艦乗組之水夫共やゝも是迄ハ醉興之餘り市街を散歩之折往來之者ハ疵付且ツハ巡警番士之伍間ニ

立入鞭杖を以て漫ニ打擲不法を働ニ及べし右ハ泥酔中宿意ありての所
爲トハ聞へざるも向後右様之事屢ある時ハ無餘義手荒の所業ニ及ぶ
んも難計余ニ於て痛心する所をハ其許等深く注意して嚴ニ申觸らし
雙刀を佩する者ハ勿論商賣之庶人ニ至るとも故なくして失禮を加へざ
る様其配下及び軍艦乗組のものへも布告あらんを欲す此段申入候謹言

文久元年酉八月

竹本

瀧川

酉八月十九日達ス

英亞蘭佛各國コンシユルロ

以書簡申入候然ハ實九發砲之義ハ小銃多り共差留候段先般方度々申達
置候處此程追々相緩み屢流丸の飛來る處ありて人々危ふめり定て新渡
之外國人右之禁を不心得事と存候依るハ再び其筋へ達し被置度候此段

申入候謹言

文久元酉年八月

竹本圖書頭

酉八月廿日於對馬守宅佛蘭西ミニストルへ對話拔書

佛
一此度外國へ使節御越ニ付送迎之船指出方之義佛英之兩政府ニて尙一
決次第可申上候

一追々御國商人へも御指免有之商船買入銘々外國へ貿易ニ被差遣候趣
ニて既ニ黒龍江迄被遣候商船も貿易無滯出來候趣ニて承り大慶仕候
就てハ追々歐羅巴へも被差遣候様相成御國地貿易も盛ニ相成自然御
國商人とも引合熟知いさし候様可相成と奉存候

一往々盛ニも可相成候得共何分不慣ニて指支申候
一昨日外國奉行へも相談候義ニ御坐候外國貿易之義ニ付てハ外國人之
内ニて取扱方被仰付候方可然且右給分等之義ハ外國人ニも光榮とい

△し候義ニ付前段相願申間敷奉存候且ハレイヌ等何れも右取扱人被仰付候ハ、御都合可然奉存候

一追々商船も多く仕出候様相成候ハ、左様にも可致候

一私共同様各國都府へ公使被差置候様仕度奉存候

一追々左様い△し度事ニ候

一私義も此程歸國仕度趣政府へ申遣置候間其内申立通り可罷歸旨申越候ハ、御使節被遣候節同時ニ出立仕候心組ニ御坐候右ニ付相願候御國人子供之内兩人自國へ召連申度尤右ハ箱館にて罷越度趣申聞候もの有之候右子供も永く自國へさし置度候得共其義も不相成候ハ、御使節歸國之節相返し候様可仕候

一勘辨之上可及挨拶候

一使節之義國々都府も有之候得々凡何ヶ月程相懸り可申哉

一佛國にて二ヶ月程相懸り可申候先佛迄二ヶ月佛逗留中一ヶ月佛方英

迄一日半路ニ有之右都府へも一ヶ月逗留夫より魯へ一ヶ月相懸り同所へ一ヶ月逗留其外字漏生葡萄も半ヶ月宛之逗留にて可然又歸船之節二ヶ月相懸り可申右にて九ヶ月程にも相成可申候

一夫も早き事ニ候此方にてハ一ヶ年半も相かゝり可申と存候

酉八月廿日圖書頭と蘭ノコンシユールと對話

一先頃御書簡を以御達ニハ市中巡警之士へ外國人不法をい△し候節ハ元々輕輩血氣之者故自然拔刀ニ可及も難計依る其配下へ嚴敷令し候様い△し度旨被仰候意味ハ難解就てハ相伺申候

一右様亂妨之所業出来い△し候も畢竟酒故ニ候得ハ酒賣買を御禁被下度已ニ運上所脇ニ外國酒を賣候もの有之是ハ看板等迄掛置候故外國之者共上陸等之節近邊故買吞自然不法之義出来候様相成甚指支申候

一岩龜樓邊にも酒店有之是へも立寄飲酒い△し泥酔い△し候ニ付右酒店

も御引拂ニ相成候様仕度候
一日本酒ハ酒味弱ク候故差支不申候得共外國製之セニール等も強く故直ニ酌酩いさし候

八月廿日

圖書頭播磨守十太郎蘭コンシユルセテラール館に於て
一應挨拶畢て

一圖書頭久敷不致面會候得共耳之痛如何ニ候哉

一一時ハ餘程痛強候得共追々快ク相成申候江戸表へ相成候哉 此時セ

播磨守
テラール出席コンシユル退席

一先日其許方被申聞候件々委細事務宰相へ申上右挨拶今日申入候

一兩郡兩港延期之義過日も圖書頭方申入候にてセテラールも兼承知之通事務執政方御書翰參り居素々延期之義ハ我國舊來鎖國之處一時外國と交通いさし候故何分人心不折合右ハ貿易盛大ニ相成物價沸騰いさ

し候も全ク貿易故と卑賤の者あと存取候故自ら人心不折合も相生し右等故兩郡兩港延期いさし度と申入候譯にて元々懇親之廉を以差延し申度と申入候事にて右之段ハ委細セテラールも承知之事ニ候得共一應申入候且江戸へ商賣相開候義ハ其許委任ニ有之開候ても亦不開候ても其許存意ニ有之候よし右江戸へ商賣相開候義も前申入候通り人心不折合之折柄故江戸へ商賣相開候義ハ其許取計にて御書簡之通り延期被致度旨事務執政方申聞候間右之段も申入置候

一昨年中其國之者兩人殺害之義ニ付御手當筋之義如何相成居候哉と政府方被申越并其許心付候件々委細事務宰相へ申立候處宰相方拙者へ被命候ハ我國法律にてハ償ひ等差出候譯ニハ難及警親を殺害ニ及或ハ火を付ケ候共夫々罪人召捕我國法則通り行ひ候國法故何分償と申候てハ難差出候得共其許被申聞候通り本國妻子等も難認罷在候趣故右等之事情委曲申上候處執政ニ於てハ殊之外不便ニ存居候得ハ政府方右浪流いさ

し候妻子の者へ何と歟御手當も有之候間其段事務執政が被申聞候右之段申入候

一御手當之義被下置候趣自國政府へ申遣候ハ、難有御禮可申上乍併政府が御手當之義願上候譯ニハ無之候

一素が政府が願立候譯ニハ無之如何相成居候哉と之事ニて其許懇親之意を以被申立候義故右等之處ハ懸念無之様存候何を政府が御手當有之ニ付執政が其許へ御書簡ニて可申越候得共先日談判いさし候翌日早朝江戸表へ相越直様右之段執政へ申上翌日早速歸府いさし可申處少々不快ニて稍今日歸港いさし尤御書簡之義ハ少々相後候哉難計候得共不取敢御手當有之趣挨拶申入度尤償と申譯ニハ無之故員數之多少ハ難相分候一本國へ申遣候便宜有之候處ニて都合宜敷難有奉存候

一今日迄ニ挨拶申入候様被申聞候故不取敢右之段申入候迄ニ書簡之義ハ急速ニハ出來いさし兼早く共五六日ハ後を可申候得共尙又其段可申

遣候

一御手當有之候を本國へ申遣候ニ品の多少相分不申候てハ不都合ニ有

之候間御書簡被遣候を御待居可申可成丈ヶ早急被遣候様仕度候

一^{圖書頭}格外ニ延引いさし候と申ニも無之尙又右之段江戸表同役へ催促可申遣候

一船乗と申候ものハ一ヶ年手當何程ニて何弗丈ヶもふけ有之候と申極

り有之候間右ニて御勘考奉願候

一^{播磨守}其義ハ外國之習風ニてハ右様之見合セニて手當も可有之候得共此度之

義ハ政府之厚意を以手當指遣候譯ニて償と申候てハ何分難差出人情ニ

於て難捨置故政府が御手當として被下候事ニ有之候

一全ク御償と申譯ニ支無之御手當被下候ハ、右之割合を以御勘定被成

下候様奉願候たとへ八百錠と申を一錠と申ニハ難相成一ヶ年之總取

高減し候故右を目當ニ

御遣之義奉願候

- 一 外國にてハ右様可有之候得共日本政府ハ懇親を以御手當被下候義にて拙者當港へ相越候砌ハ未タ員數も難相分何を懸々評議之上にて取極候譯にて其許方相談も可致旨御手當之義政府ニ於ても規則も有之義故員數之義ハ何を御書簡之節可申越ト存候
- 一 船司一ケ年之取高にてハ八百弗ニ御座候得共右御咄迄ニ申上置候左候得ハ右を目當ニ御遣之義と奉存候
- 一 船之頭ニ有之候哉
- 一 左様ニ御坐候
- 一 兩人共左様ニ候哉
- 一 同様ニ御坐候
- 一 咄丈ケ之義ニ候得共承置可申候
- 一 右之元高申上候ハ勘定立方いとし候節五歩と歟一割と歟相懸候ふめ

の事ニ御坐候

- 一 右一ケ年取高御勘考被下父母妻子之者困窮之義御察被下政府方御手當被下置候様奉願候
- 一 右之義ハ咄迄ニ承置可申候得共御手當之義ハ格別政府之御憐愍を以被下候譯にて極めて其許被申立候通ニハ相成申間敷哉咄迄ニ承り置申候
- 一 只今申上候ハ彼船司取前丈ケ之義を御咄迄ニ申上候事ニ御坐候
- 一 吳々も外國へ對し償と申譯ニハ無之其義ハ能々其許ハ心得父母妻子等ニ手當として遣候譯にて決して償と申銘義ニ無之候間外々之者へ右弊不押移様被心得候様いとし度存候
- 一 過日も申上候通りにて難澀之者へ御救助之譯にて決して償と申義ニハ無御坐候尤私方願上候譯ニハ無之様奉願上候
- 一 其義ハ承知いとし候

一御書簡御遣し相成候得ハ他へ洩候事々無御坐候銅にて御遣相成候得
ハ長崎にて引替差遣可申候

一右ニ付御繁用之中御周旋被下難有奉存候

圖書頭一其許被申開候意も相届キ大慶存候

掃部守一兩都兩港延期之義ハ申入候事ふて相分候事と存候且江戸表開不開と申

譯ハ其許委任之事故不開様是亦承知之事と存候

一右御手當之義相願候も大坂兵庫湊開港延期之義も殺害之者へ御手當

にて御遣し相成候得ハ政府ニ於て御懇親之意相願を御都合宜と存

候故申上候事ニ御坐候

一其許被申開候處能相分申候

右にてセテラール退席コンシユル罷出候

八月廿一日 竹本圖書頭大井十太郎フランスコンシユルハ對話

一應挨拶畢る

一一昨日通辯官ウエルニ義ミニストル駕籠江戸表へ差送候ニ付神奈川

宿へ罷越人足相雇度旨會所へ罷越申談候處前錢ニ無之てハ人足差出

兼候趣被申開候其内通詞品川英介罷越候ニ付漸人足差出候得共一體

ミニストル用向よて人足相雇候ニ右様差支候る不都合ニ御坐候

一夫々支記向之詰所にてハ有之間敷候

一御支配向之詰所へ罷出候由ニ候

一一體運上所へ被申出候ハ、左様之不都合々無之候以來も右様之不都合

無之様可爲取計候

一江戸表にて通詞へ申開候得々速ニ相辨申候何れにて人足雇上等

ニ差支候義ハ無之と奉存候

一組頭へ委細承り候所にてハ全神奈川會所支配向へ申開候ニハ無之支

配向之者アメリカコンシユル所へ罷越歸り懸右混雜を見受候由ニ候同

所へハ組頭も相詰候事故會所へ被參候ハ、右様之差支ハ無之候以來ハ運上所詰重立候者へ可申聞候尤其許カ書面等差出候得ハ速人足指出方等取計可申候

一私も不罷越候ニ付耽与々存不申候得共ウエルエ申聞候處ニテハ全ク

役人へ相願候よしニ御坐候人足雇入運延ヨ及候ニ付翌日ミニストル

御老中方へ罷出候義延刻ニ及び旁同人も立腹いし居候趣ニ御坐候

一役人之詰所ニ候ハ、差支候様之義ハ無之何を共其節被參候ウエルエ當方へ被參篤と承り候ハ、發輝と相分可申候

一右ハ過去候事故いし方無御坐候得共以來ミニストル井コンシユル等用向ニテ人足雇入候節ハ速ニ差出候様いし度奉存候

一承知いし候書面等運上所へ可差出候

一過日御國人へ對し水夫共酩酊之上不法いし候旨御書翰被遣候處御書翰之意味合ハ右様之事有之節ハ外國人を刀殺及候趣ニ候得共全

ク酩酊之上ニ付左様之御處置有之間敷奉存候

一外國人が劔ニテ切掛候様之節其儘に打過キ候譯ニも不相成志りし安ニ切傷いし様成事ハ無之候得共夫ニ其節之場合ニより下賤之者共ハ如何様之義可致も難計先ニ左様之節取押候カ外いし方無之候

一右様之義重ク候上は無餘義切傷いし候場合ニもいさる之御文意ニいし度何分御書面ニテハ左様聞届候

御書翰差出ス

一應申入る候一體越前守人數井支配向等ハ外國人警衛之爲メ夜中見廻候義ニテ全政府之厚意ニ有之夫を都る不法等仕向候ハ於拙者甚不快ニ存候右様不法者有之劔ニテ向ひ候節カ當方下賤之者ニいし候てハ切傷可致も難計尤兼々政府カ外國人ニ對し不法之義無之様可致趣ハ精々御達も有之夫々心得居候得共自然外國人カ有様仕向候節カ何様之事カ自然兩國之和親ニも障り候様之義出來いし候てハ不容易義ニ付右

ま前以申入置候ニ付其許配下之者へ篤と被達候様いし度右主意申遣し候事ニ有之候

一御書翰にてハ佛人之所爲の様被存候

一左様にてハ無之れつきの者共不相知ニ付各國へ申遣し以來左様之義無之様いし度旨申入候事ニ候

一自國水夫ニ不限商人共ふ至る迄右様亂妨之者ハ無之乍然精々可申達候

一酩酊人と申てハ御國內ニも數多有之候商人シラール出府中同人を頼りニ脱カ誘り候もの有之ニ付相糺候處全酩酊と申聞候

一東禪寺之義もミニストルカ申越ニハ酩酊ものゝ所爲と申越候

一私江戸表カ罷越候節途中役人ニ出合候處惡口等いし片寄セ候亦相過候其節ハ付添の者拾五人程も有之候ニ付相尋候處帝之役人にて酩酊いし居候よし申聞候得共敢る酩酊とも不被存候

一被申聞候通も儘惡口等いし候ものハ可有之候得共敢て打擲杯いし者ハ無之此度之義も事柄も致相違居候其許道中にて出合候役人何人程参り候哉

一三人程参り申候付添の者へ相尋候得薩州家來と歟帝の役人と歟申聞候

一夫も付添のものゝ不心得ニ有之をへて付添の者も先乗等無之てハ不都合ニ候其義も承知いし被居候哉先乗さへ有之候得ハ右様不都合ハ無之候

一右ハ酩酊の義を申上候酩酊とさへ被申聞候得て夫にて御申譯ニ相成候哉於御國も右様之義儘有之ニ付申上候

一當方にてハ酩酊人ニ候得夫も勘辨可致候得共劔杯にて立向候得ハ何分其儘ニも打過かしく候東禪寺之義を引競候てハ事柄も相違いし候其次第ニも寄候事にて已ニ先日軍艦乗組のもの當方職人へ疵爲負候事有之其者と取締相渡候様相成申候

一右等も其儘御勘辨相成候事と存候東禪寺にて英人へ疵付候節も英國方にて勘辨いさし候

一勘辨も被致候得共疵付候ものハ夫々罰し方いさし夫にて被致勘辨候事ニ有之候

一仰ニハ候得共御國にて右様之もの有之節ハ不法のもの共一年も二年も相知せ不申候

一書翰差遣候義其許不承知ニ候ハ、其趣返書可遣越候各國コンシユルハ承知ニ候得共佛國コンシユルニおんく不承知と申事故政府へ可申遣候

一御書翰を御預り置申候外國人方劔にて切掛候節ハ自然役人方刀ふて立向可申乍然外國人方ニ決て劔杯ハ持參不致候

一乍然棒杯にて打擲いさし候節ハ同様ニ候其許ニハ不相分と存候
一意味ハ能相分申候

一其書面不承知ニ候ハ、當方へ可被戻候

一何きミニストルに申聞候上御返書可差上候佛人ニ於てハ酩酊いさし候もの一切無之候

一其趣返書可被指越候
一承知仕候

一とへて穩便と申義御達も有之候ニ付刀にて切り候様成事無之様いさし度且又警衛役人等ハ大男を御撰可被下候左候得え取締候事も出來いさし候

一其趣ハ相心得居候得共佛人ニ於てハ醉狂人無之と被申候上ハ其國之者ニ支無之と存候

一再應申上候通り於水夫ハ一切武器類持參不致居留商人共も同様持參不致候えりし若致持參居役人等へ對し差向候節ハ御取上可被下候左候ハ、強てさりらひ候様成義ハ無之其上よて御取押可被下候

一承知いさし候

- 一 決して自國のものふ役人を妨候ものハ無之其邊ハ役人へ御達置可被下候御國人ニ外國人へ對し悪口等いさし候者ハ數多御坐候
- 一 悪口杯いささ者ハ可有之候
- 一 私市中通行の節役人參り脇へ寄せと申者有之候得共自分ハ片寄不申脇ニ居候ものハ馬鹿ものと欺申聞候
- 一 其許ハ常々一人ニて歩行いさし候哉
- 一 一人馬上ニて通行いさし候
- 一 壹人ニて通行いささを候てハ何きの者共不相分コンシユルの印等有之候得ハ當横濱中其趣可相觸候
- 一 帽子に金所を付候ものハ商人ニ無之候日本にて帶刀人ハ必士官と申事相分り居候哉
- 一 夫ハ相分り居申候
- 一 敢る左様ニても無之小使杯も帶刀いさし候帶刀人ニも役人の家來等

有之見分ケかさく候

- 一 夫ハ次第も有之候得共ニへて政府ニてハ外國人迷惑ニ不相成様御世話も有之候右を厚意ニ被存候哉いさ被心得候哉
- 一 居留商人軍艦乗組の者へハ御國役人へ對し不法不致候様相達可申候御國ニても同様御達可被下候
- 一 先達中程ケ谷茶店へスチル同道相休食物を乞候處役人共指留申候
- 一 休息被致候茶屋ニ食物等無之事故斷候義と被存候
- 一 何きの役人ニ候哉相尋候處役人とのみニて不相分候右之義を敢る申上候義ニも無之候
- 一 其節ハ茶のみ差出し候哉
- 一 左様ニ御坐候平日休息いさし候茶屋ニて食物等も有之其節ハ役人等差留不都合御坐候右ハ御咄し迄ニ申上候
- 一 左様不都合も可有之候得共政府ハ左様之不敬無之様精々申觸置候

- 一先達も鎌倉茶屋相休候處戸をへ候不都合并金澤にて役人共立出自分共を妨ヶ候義等有之右を其節申上候
- 一夫も全ク妨候義にてハ無之當方ニ夫大名家來も有之其許ニハ其邊難見分事可有之候
- 一屢左様之事有之不都合奉存候
- 一以來他行被致候節をいつきの方へ罷越旨運上所へ被申聞候得左様不都合之義も無之候
- 一其儀前以難申上人馬等も勞を候節ハ申上候方角へ必參り候譯にも不
相成候
- 一乍然ト通被申聞度候
- 一政府役人の妨ヶ不致候義も兼る信用いさし居候附添役人等有之節ハ
一向妨候者無之候私一人通行之節も何分被妨候
- 一左様不都合有之候ハ、以來他行之節役人を召連可被申候

- 一仰ニハ候得共左様相成候てハ役人同道之節ハ妨無之壹人之節も妨有
之事と相成是又不都合御坐候
- 一當支配之者付添候得ま不都合之義も無之候以來召連候様可被致候
- 一まへて外國人遊歩いさし候丈ヶ之場所ハ今一應御沙汰被下置度奉存
候
- 一夫も尙又相違不都合無之様可取計候
- 一先日英コンシユル方茂申上置候運上所脇ニ外國人の酒店有之候水夫
共兎角上陸之上右酒店へ立寄醉狂いさし候ニ付右之者と早々其處を
立退候様御命可被下候
- 一早々取調可申入候
- 一彼も無宿者と存候
- 一まゝりし商人共内ニ召使候ものニ可有之間其ものへ申付爲立去可申候
- 一全無宿ものニ候ハ、爲立退候て宜敷候

- 一 無宿者ニ候ハ、追拂可申候
- 一 運上所脇ニて役人の出入等繁ク醉狂人等無之混雜御坐候ヲ不都合ニ付此段申上置候
- 一 先達中々度々申上置候水夫共湊崎丁酒店等へ立寄酩酊之上散歩いし自然不都合等も有之候ニ付水夫共ニハ酒を不賣様御申付可被下候
- 一 當方ニて酒を不賣様可申渡間其國水夫共へも必酒を不買求様相達可被申候
- 一 佛國商人の賣水夫共一切酒類不賣様兼る相達し置申候
- 一 水夫共へ急度不賣^{買カ}様可申達候
- 一 自然買求候得々船將方ニて罰申候
- 一 居留商人ニ右様之義々無之候水夫杯ニハ儘醉狂人有之亂妨等相働候ニ付取締役人ヲ大男を御撰可被下候
- 一 過日亞國コンシユル山頭コンシユル館地所見分罷越候同人々何を之

邊望ニ候哉

繪圖ニて談判

- 一 一體其處望ニ候得共其許方被望候地所ニ付亞コンシユルの賣外之地所相渡候積ニ有之候
- 一 其許方地所を横ニ長くいし度よし
- 一 全クミニストル好ミニて海岸手の地所を望ミ申候
- 一 此方ニいし候得ハ英之方と高サ同様ニ候
- 一 低キ地所を築立候てハ餘程手も掛り候事故英之方同様ニいし候方可然存候間尙ミニストルへ可申聞候今一應地所懸役人同道一見いし取極可申候
- 一 見分可被致候
- 一 今日々セテラール用向有之罷越候間尙明日可及談判候
- 一 今一事申上度候商人コンスタンス普請一件最ふしん成功ニ相成候哉

未タ不取掛候ハ、當方ニテ外々へ申談普請いさし候間否御取調可被下候

一先日申上置候堀ヨリ脇往來筋掃除之義奉願候右々昨日和蘭コンシユルカも申上候義と存候

一蘭コンシユルカ申出候モ下水之義ニ有之候

一下水ニテハ無之往來ニ御坐候草杯生繁り候間右掃除奉願候

一承知いさし候

一コンスタント普請之義取掛居候哉否自分方へ御申遣可被下候

一取調明朝迄ニ可申遣候

一承知いさし候

酉八月廿二日 於對馬守宅アメリカ公使へ之對話拔書

一兼而詔候軍艦既ニ本國へ申遣候哉

一未タ御治定ニ御坐候事脱らんと實ハ差扣へ居申候未タ本國へ不申遣候

一其方へ奉行カ左様之義よても申入候哉不存候得共此方よてハ差支無之候

一右船之義ハ代料御差越不相成候てハ本國ニ於テ差極め取計難候其義ハ御心得不被爲在義と存候間一應可申上候尤格別之高金よも御坐候得て一同御差遣相成候事ニハ及不申候割合を御遣相成候方可然存候右御遣相成候ハ、是カ支那へ差送り夫カ英國夫カ本國へ差送候手續ホ有之候間凡五ヶ月程も相懸可申候私義も本國へハ來年正月初旬ニハ罷歸候運ニ相成可申存候御國政府おゐて思召も御坐候ハ、歸國の後可然職人見立打立させ候様可仕存候間其節之事ニ被遊候てハ如何御坐候哉

一右様相成候ハ、安心之至ニ候

一右打立方ニ付役人御差遣ニ相成候とも尙私カも心添いさし不都合無之様取計候様可仕候

一此亦右様之運ニ致度存候事ニ候左候ハ、何日頃船出來いし本國を被差送可申哉

一私見込ニてハ御國退去後十ヶ月目ニハ出來いし御國へ到著仕候様可相成存候

一夫レハ速ニ成功之事ニ候

一過日外國奉行對話之砌ロントン武學校より獻上仕候大砲格別御意ニ叶候由承知仕候

一右ハ格別利用之品ニ有之候

一今般御詔相成候新船へも右同様之大砲思召次第ニて据付候様可仕候
右かゝふて八十封度之品ニ御坐候得て百町餘も相とゞき可申勿論夫丈ケ之價も上り可申候

一右様通例之大砲相備候得て八十萬トルラル位候得共此程獻上仕候様之
大砲相備候得て十萬トルラル程高價ニ相成可申候

一先頃中本國戰爭有之趣心配之義察入候此節之模様如何ニ候哉承り度候

一南部之方騒立候得共華盛頓^{ワシントン}新約基邊ハ靜謐ニ有之候一兩日以前本國外國事務局ハ書簡到來爭亂之義も速ニ靜謐ニ可及見込も有之趣申越候

一大統領ハ矢張ブカナンニ候哉

一蒲家南退役仕當時之者ハ林^{リン}徑^{キョウ}と申候

一右様之場合ニ及候てハ外國船等之出入差支無候ものニ候哉
一仔細無之候

一其本國戰爭之義ニ付英國公使ハ書簡さし出英國支配之者ハ事務ニ携り候もの武器等を備へ候船々等アメリカ諸港へ相越候事禁制いし雙方とも携り不申中立いし可申旨觸示し候よし^{ホノマ}ニてハ左様ニ候哉
一相違無之候

一此方丈ケ之勘辨ニてハ左様之筋ニハ有之間敷と被存候得共外國ニハ右様之振合有之候事ニ候哉

- 一 左様之風習ニ御坐候右ニハ次第有之事ニ候一應可申上候
- 一 元來一揆徒黨と申ものハ政府へ對し叛逆致候ものニ有之候間自然政府ハ力弱キ方ニ御坐候間是非とも外國之力を借り不申候得共不相成候間何さふも外國へ與力之義頼入申候乍然右等ニ荷擔いさし候ては條約取結候政府へ對し懇親之義無之間右へ共荷擔不致もし致荷擔候ハ、罰候事ニ有之候
- 一 勿論左様可有之候乍然徒黨之ものハ政府ふ背き候者故條約を結候國々ハ政府を致補翼取鎮方可致筈ニ心得候處中立傍觀いさし居候趣ニ相聞候間難心得存候事ニ候
- 一 元來外國と外國との戰より起候義ニ有之先年中英佛兩國と魯西亞と戰爭有之候節本國ニても荷蘭ニても中立いさし取合不申候
- 一 兩國之戰ハ左も可有之候得共國中之一揆ハ左様ニハ有之間敷存候
- 一 此前支那ニ戰爭有之勿論内亂ニ有之候然る處各國相戒め候て何さニも荷擔不致様致申候右ハ各國通例之規則ニ御坐候尤御國之義ハ別段

ニ有之候則御取結ニ相成候條約面軍器兵勢とも差出可申と書載有之候通り本國カハ必き御國政府へ御加勢申上候事ニ御坐候万一御國おひく左様之義も有之候ハ、大統領政府より御國政府へ共條約之ケ條ニ基キ加勢申上候趣觸示し申候

一 各國へ觸き候哉

- 一 各國へハ觸き不申乍然各國へ出使致居候アメリカ臣民へハ悉ク相觸申候尤右ハ御國ト本國限り之條約ふて外西洋外國條約面ニハ無之候
- 一 左候得ハアメリカと英國ニハ右様之條約無之故ニ候哉
- 一 外國ニハ無之御國而已ニ御坐候乍然右様之義有之候節中立いさし雙方とも不携義一般之規則ニ御坐候
- 一 亞米利加内亂ニ付右様英國よて中立いさし居武器賣不申との事ニ候ハ、自國迎も其國へ武器ハ賣渡し方相禁候方ニ可有之候哉
- 一 御國ニてハ外國同様出商賣いさし候者も無之迎も御國民等右へ携り

候事出來不申候間右様之御觸ニも及不申候且縦令出商賣等御始先相成候とも十艘二十艘位之少數ニ候ハ、其迄ニハ及不申候

一 右様之儀有之候とも他國ミニストルコンシユル等ハ其儘致居留居候哉

一 一致居留居申候外國交際おハく更ニ差障も無之候

一 外國交際之義リンコーン之方ニ可有之候

一 左様ニ御坐候兼て御承知之通り大統領義ハ入札にて入選いし候規則

則て四年目ノニ交代いし前大統領フカナン今大統領リンコー

ンと規則通り相禰受いし候義ニ付外國交際ニ於て聊差障無之則

ち御手前様方追々御役替ニ相成候と相違無之私共御國へ罷越候より

大統領も既ニ三人相交り最初コフンクリンビルスと申者ニ御坐候

一 能相分り申候最初英國方右内亂之義ニ付申立有之候得共此方ふてハ本

國政府之方へ助力いし可然様被存候間相尋候事ニ候

一 御了解相成候趣大悅仕候

八月廿二日

英人 圖書頭 英コンシユル 抜キ書

一 測量舟之義御老中方カミニストルハ御懸合之趣ハ京都カ 大君へ被仰

出候趣有之測量いし候てハ品々御都合之義有之候間御老中方カミ

ニストルハ御申聞有之其趣承知仕右ニ付蒸氣舟ニて追驅候積り御坐候

ニ付石炭ニ差支候間軍艦船將カ石炭之義御談判仕候義ニ御坐候

一 右ニ付昨日ヲ一テン船當港出帆江戸へ罷越アルコツク之命を受可申

筈之處彼の雨天ニて出帆見合多分出帆可致義と被存候

左之ケ條月日不分之内カ書キ記し置く事八月九月之間ニ

一 異商カ物貨指出候間其品物ニ應し價高下御付被下度旨申立候事

一 差出候品物之一ツ宛見本差出度旨申出候事

一 賣殘候品ハ土藏へ圍ひ置度旨申出候事

此義ハ追承
候得ハ伊勢
京都方ハ有之
候間其ハ汚
シ候てハ恐
候間右海を測
量間不相成御
申間ニ相成御
事由ニ無御
老中カ由ニ掛
合相成候由也
然支候石炭本
差支候石炭本

之通ニ付志州
鳥羽之港へ書
狀を遣し置キ
測量船参り候
時渡し候答ニ
相成候よし候
御坐候

一 圍置候品賣捌候節其趣申立運上差出可申旨申立候事

八月廿四日

圖書頭 十太郎 蘭コンシユル

一 昨日罷越彼是世話ニ相成候

一 今日罷越候ハセテラールカ被命候用向ニ御坐候

一 昨日セテラール館へ罷越候節軍艦食用品ニ相成候米或ハ麥士官カ買入

候節運上所へ其段申出候方ニ可有之と談判いし置候處未タ蘭セテラ

ールカ返事無之ニ付如何相成候哉左右を承度候

一 其義ハ被 仰聞候通り以來輸入之節運上所へ相届書付を貰候上ニテ

買入可申候

一 左様取計候方可然と奉存左も無之節ハ商人共軍艦食用品之趣ヲ伴テ

買入候様相成候てハ自然規則を取亂申候

一 何を運上所へ不申出候得ハ混雜いし候故吳々も前斷之通り取計候様

と申聞候事ニ有之候只今被申聞候通被取計候得ハ聊子細も無之至極安
心いし候

一 以後米麥入用之趣運上所へ申出候ハ、差支ニ不相成様早々御取計之
程奉願上候

一 承知いし候夫ハ速ニ取計可申候

一 蒸氣舟近々入港可致候間其節申出候ハ、早く御取計奉願上候

一 承知いし候

一 先日書翰を以御達ニ相成候玉込發炮之一條ハ蘭人ニ於是迄玉込之發
炮いし候義決る無之候

一 玉込之發炮いし候節ハ貳百ドル之過料取立候規則ニ御座候

一 アメリカ人度々發炮いし候

一 各國コンシユルカ申聞候ニハ兎角亞人ハ發炮いし候様承り候

一 私近所ニアメリカ船入港可致趣承り其節ニ晝夜之差別もなく發炮い

△し候義と奉存實ニ懸念ニ有之候
一甚た不宜候

一蘭人炮發い△し候得ハ貳百トル之過料亦馬乘ニて市街通行之節馬を
驅させ候得ハ十トル之罰金を取立候規も御座候若し市中驅乘い△し
候節役人夫レを見付兩手を開キ候得ハ則十トル之罰金差出候則ニ御
坐候故蘭人ニ於てハ實九發炮ハ勿論乘馬驅乘等一切無之候其上馬上
ニて橋上通行之節手強く相乗不申候様嚴敷達置申候

一委細相分申候至極宜敷掟と被存候

一先達被申聞候牛骨捨場之義以來不相成趣キ嚴敷其筋へ申置候ニ付此節
取捨候者無之と存候

一此節取捨不申候難有奉存候

一兼て松平石見守様辨天居留地揚場之義申上置候處未タ御同人ノ何共
御沙汰無之候哉

一右一條ハ兼及承候得共全體此度揚場ニ相成候ヶ所ハ辨天之外海岸ニて
取締も不宜甚△不安心ニ被存候就テハ一丁目渡舟場カ上陸被致候ハ、
取締も宜敷於拙者も大安心い△し候

一右ヶ所カ上陸い△し候得ハ居留地へも廻り遠く相成候のみから後追
々米藏造建ニ相成候節ハ右へ運送方之不便も碍々甚差支申候尤右上
陸等ハ外人ハ一切相禁只私而已ニ御座候尤舟之漸寄候様なをハ三
しニても宜敷候

一三もしニて差支ハ有之間敷候得共只今申候通り上陸場ハ如何ニも外海
ニて甚要害惡敷全ク右を彼是と申ハ賣買品輸出入を疑惑い△し候譯ニ
も無之畢竟浪人等之懸念有之候故ニ候居留地後手之方ニ候得ハ役人も
居防禦之爲メニハ至極宜敷大ニ安心い△し候

一左候ハ、門を建可申哉都合も宜敷且ツ取締ニも相成申候

一拙者ハ右ヶ所駈と不相分候間何を見分之上可申聞候其節不都合ニ候得

其段及斷候

一何分ニも近々中御挨拶可被下候上陸之度甚々差支申候

一此間約定之金子今朝^{爲カ}持差廻候金子受^{ホテ}取置候義と存候

一儘ニ御受取申候

右畢る退席

酉

八月廿七日於對馬守宅佛公使へ對話拔書

書簡指出

一此書簡ニナタール一條ニ付過日御返簡差遣さ候間右之義ニ付尙
 申上度義有之候其義相認候へ再答ニ有之候同人義も最早勤仕も難
 出來候間同人へ政府方之御仁惠と思召殺害ニ逢候支那人とも兩人
 へ箱館表軍艦之義ニ付政府に返納可致引負之中にて御差引同人并
 支那人家内之者活計之爲免被下置候様偏ニ奉願候

一右之義ニ付るに外國奉行方談候義も承知ニ候哉

一御主意之趣も承知仕居候得共御仁惠を以同人へ被下置候様相願候義
 ニ御座候

一左候ハ、勘考之上挨拶可及併し償金と申譯ニハ無之段承知ニ候哉

一名義之處も何きニても宜敷御仁惠を以被下置候様相願候義ニ御座候
 一承知いし候尙取調可及挨拶候

一尙一事申上候此間和蘭コンシユルセチラールカセチマルカ條約取結
 之義申上候趣ニ御座候右ハ一ヶ國ニても條約御取結之義御國之御爲
 と奉存候

一右も最早返書もさし遣候決る取結不致候其許我國之爲と被思候ハ、彼
 方へ斷り之義周旋有之様致度候

酉九月七日於對馬守宅荷蘭コンシユルセチラールへ對話拔書